

龍宮の秘宝

1945年各務原空襲の記録



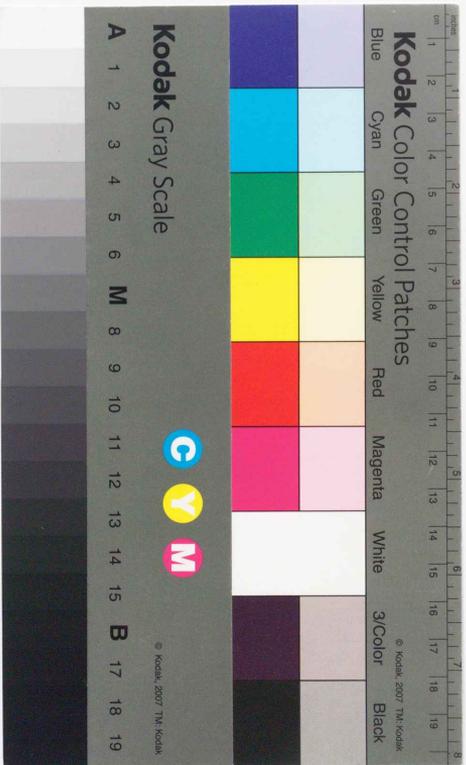
1974年度 岐阜県立各務原高校
郷土研究部

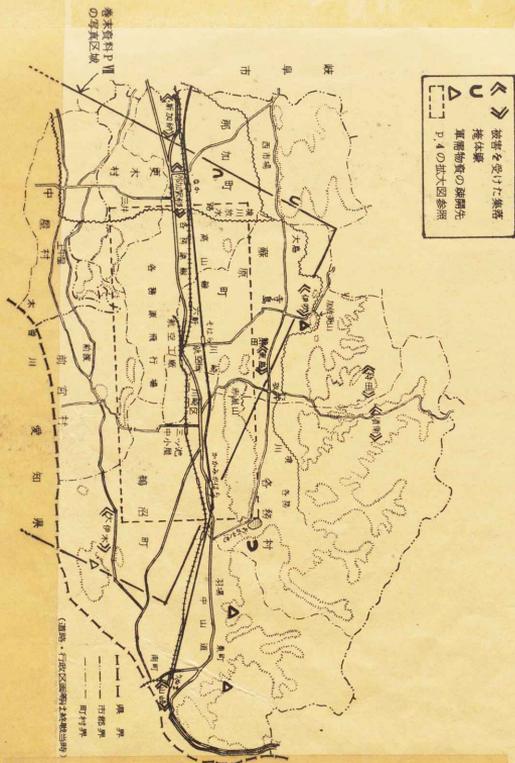


112101738



8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6





各務原空襲関係地図



<爆発の瞬間>

郷土部長の君が、サンケイ新聞社刊「B-29」という本を横っている偶然にも発見した写真。写真説明には「各務ヶ原飛行場にさく裂するB-29の劇的な瞬間の名刺」であった。アメリカ空軍が爆発の瞬間を撮影したもので、左方に見える川は境川放水路であり位置は飛行場西端にあたる。人家からその巨大さ(1トン爆弾か)を想像されたい。

目次

はじめに	2
I. 概要	3
II. 6月22日の大空襲	4
1. まず市街地へ - 那加の場合	5
2. 攻撃目標の渦中において - 川崎工場の場合を中心に	7
イ) 1週間続え続けたガソリンタンク(7) ロ) 巻きあがる黒煙、逃げまどう勤労学徒	
- 川崎工場の場合(7) ハ) 三菱航空機組立工場への爆撃(15)	
3. 飛行場 工場群隣接地域の悲撃	16
イ) 身元が分からなくなった多くの遺体(16) ロ) 直撃のすさまじさ - 中小屋の場合(18)	
III. その後の爆撃	21
1. しらみ潰しの爆撃 - 6月26日	21
イ) 息子を捜しに来た両親の爆死-川崎区の場合(21) ロ) 命を死守のために死んだ少年達 - 妻成跡の場合(22) ハ) 工場群から遠く離れた山中にも - 鶴沼山崎地区の場合(23)	
2. はじめての焼夷弾爆撃 - 7月12日	23
3. 突如のねらい撃ち - 戦闘機による機銃掃射	25
IV. 各務原への勤労動員生徒について	27
1. 動員への動き 2. 動員の実際	27
3. 動員生徒の生活	29
V. これまでの歩みから	32

(各務原空襲関係地図…表紙裏、付録資料…I~VII.)

はじめに

80年前、アメリカ空軍の爆撃により、各務原は多くの被害を受けた。しかし80年の現在、その傷跡を発見することは容易ではなく、その時期の詳細な記録も残されていない。その空白を埋めるのが、そのことを経験した人々の言葉以外には残されていない以上、ほく達がやるべきことは明白であった。

2年間にわたるこの活動は多くの困難を作ったが、1年目に「各務原空襲の記録——郷土研究第1号」という形で、その中間報告を出すことができた。この報告は予想外の幅広い反響を呼び、ほく達の活動への強い動機となった。しかし「第1号」は攻撃目標であり、最大の被害を受けた川崎航空機岐阜工場（以下川崎工場と略記）・飛行場・川崎区などの詳細を欠いていた。そこを埋めるのがその後の課題となり、残る1年はその仕事に集中された。

ところで、この仕事のためには川崎工場とそこで働き爆撃を受けた勤労学徒について、その詳細を知る必要があった。特に後者はほく達と年齢を同じくする人々が経験した悲惨として、どうしても独自の調査を行ない、その実態を明らかにしたいという欲求があった。川崎工場などで働いていた多くの人々は、学徒も含め、ほく達とが地元の人ではなく、戦後各地に分散したこともあって、その実態把握の活動は雲をつかむようなものであった。しかし多くの方々の協力により、その概要はつかむことができたのではないかと思っている。

そしてここに「第1号」との合冊という形で、各務原空襲の全体像および学徒動員の実態について一応まとめることができたわけである。今、はたしてどれだけ空白を埋めえたのか、と問われると自信がない。やり残した課題も多々ある。しかしほく達は貴重な証言を通じ、被害件数の列だけでは想像することのできない、ある実像に、多少なりとも迫りえたのではないかと思っている。

ほく達はこの記録を始めるにあたって、<1>ほく達が経験する事なかった戦後80年の原点の最も苛烈な一時期を、ほく達自身の手によって再確認すること、そして、2)その仕事を通じて80年前の「事実」を再びくりかえさない保障をほく達自身の内に構築してゆくこと>を出発点とした。そして今、その仕事の一応の区切りはついた。ほく達はこの「事実」から何かを論じ、早急な結論を下そうとは思わない。今ほく達ができるべきこととは、この「事実の重み」をかみしめる中から、新たなほく達自身の出発を期すことであろう。

おわりに、この記録を作るにあたり、ほく達の細い取材に快く応えて下さった方々を始め、多くの方々のあたたかい御協力を得たことを深く感謝いたします。

1975年2月

岐阜県立各務原高等学校 郷土研究部

I 概要

1942(昭和17)年4月、B25が5都市を奇襲した時に始まる本土空襲は、B29の出現により本格化した。この重爆撃機B29は、全幅約43メートル、全長約30メートル、2.200馬力のエンジン4基つけ、7.2トンの爆弾または3.840発の焼夷弾を積載し、高度1万メートルの飛行が可能という、当時としては恐るべき爆撃機であった。

B29による本土空襲は、1944(昭和19)年6月、中国の成都を基地として北九州地方を爆撃したのに始まるが、機数も少なく被害はわずかであった。しかしサイパン島が陥落(7月9日)した後には、ここを基地として大規模な爆撃が行なわれ、大きな被害を出すようになった。初期の爆撃は工場に対する高々度からの精密爆撃であったが、1945(昭和20)年8月10日の東京大空襲以後は、全国主要都市に対する低空からの無差別焼夷弾爆撃へ変化していった。またこの年3月の硫黄島陥落後はここを基地として、P51などの戦闘機が加わり、さらに多くの被害を出すに至った。

岐阜県内への爆撃は1944(昭和19)年に始まるが、大規模な爆撃は1945年6月22日の各務原空襲以後であった。当時各務原には、陸軍飛行場(現航空自衛隊岐阜基地)、川崎航空機岐阜工場(現川崎重工岐阜工場)、航空廠、三菱重工組立工場などの軍事、工場施設があったため、ここを目標として、B29・P51などの軍用機による10数回の重爆撃が行なわれた。特に6月22日・26日両日の爆撃は激しく、大型1トン爆弾を含む高性能爆弾7.8トンを投下し、多大の被害が出た。しかもこの爆撃は、工場群、飛行場だけではなく、非戦闘員の居住する那加周辺、川崎区、中小屋、各務原駅前、前宮などの周辺部の民家をも巻きこみ、そこにも多くの被害を出したことが注目される。現在までに確認した主な空襲は次のとおりである。

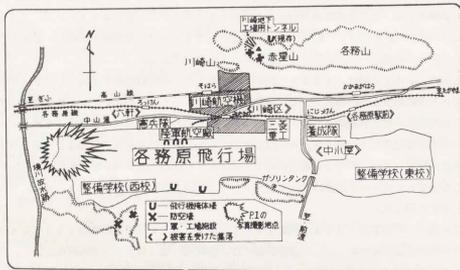
1945(昭和20)年

4月3日	B 29 1機	埴田付近へ来襲、死傷者6名、被害家屋10戸(初空襲)
5月	B 29 数機	軍事施設を偵察
6月9日	機載機4機	飛行場、航空廠を襲撃、1機撃墜する
6月22日	B 29 数機	那加駅前周辺、川崎工場を中心とする工場群、川崎区、中小屋、各務原駅前周辺を爆撃。死傷者多数、被害家屋605戸
6月26日	B 29 約90機	川崎工場、航空廠、川崎区、中小屋、前宮を爆撃、死傷者43名、被害家屋285戸
7月12～13日	B 29 47機	飯野町伊吹など爆撃
7月15日	F 51 100機	各務原全域を襲撃
7月19日	F 51 100機	工場群、飛行場を襲撃
8月2日	F 51 数機	〃
8月14日	F 51 100機	〃

日本大空襲(下)。岐阜年鑑(8・23)編沼町史、岐阜合同新聞、証言などにより作成。被害数字は岐阜年鑑によったが、不完全な数値であり、実数はこれを上まると考えられる。

II 6月22日の大空襲

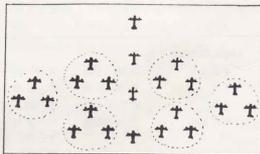
＜攻撃目標となった飛行場・工場群地図＞



昭和20年6月22日午前、西方より飛来したB29 64機は3派に分れ、各務原西方の那加駅前周辺を爆撃し、次に川崎工場、航空廠、三菱などの主要目標を、そして滝沼川崎区、三ッ池中小屋、各務原駅周辺を爆撃し、東方へ飛び去った。これは県下への初めての本格的空襲であったが、日本側の反撃は数機の戦闘機が不破郡上空でこれを迎撃したのみで、B29への損害はほとんどなく、各地に配所されていた高射砲もB29の高度までには届かず、全く一方的な爆撃に終始した。

これまでにも空襲はあり、その後も軍事目標への鉄砲な爆撃がくりかえされたが、この日の爆撃は最初の大規模な空襲であるばかりでなく、非軍事地域にも大型爆弾が投下され、住民の多数をも殺傷した点で、「各務原大空襲」と呼ぶべき最も悲惨なものであった。

この日の空襲の様相を体験者の証言を中心に順を追って再現してゆこう。



＜B29の編隊図＞

先頭で司令機と思われる1機が飛び、その後の中央線上に3機が飛行し、左右に3機ずつの小編隊が3編隊ずつ飛び、これで一隊を形成する。この後に2派、3派が同じような編隊で後続し、あわせて64機が飛来した。
(中野梅雄氏による)

F3、※サイパン島はマリアナ諸島中で最大の島。第一次大戦後日本の委任統治領となった。この陥落は東条内閣崩壊の契機ともなった。 ※昭和朝鮮戦争にも参加したアメリカの戦艦。

F4、空襲大空襲が始まったのは20年7月9日夜半からであった。

1. 先ず市街地へ — 那加の場合

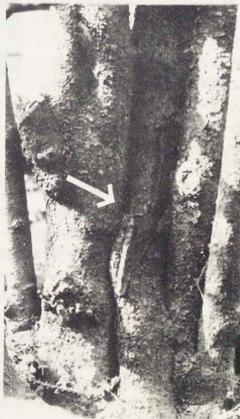
6月22日朝9時過ぎ、B29は先ず国鉄高山線と中山道（現国道21号線）の間を中心に、軍事施設のない新加納、西野町、楽天地、本町、日之出町周辺に大型爆弾（1トン爆弾か）を10数個投下。これより上記5町では28名、那加全域では48名の死者を出し、那加駅前周辺はほぼ全半壊した。この時の模様を那加本町の今尾義祐氏は次のように語る。

＜子を背負ったまま死んだ母＞

昭和20年6月22日午前9時40分ごろに、本町・日之出町・楽天地を中心に、那加町内を爆撃しました。那加町内へは1トン爆弾を12、3個落していますが、大部分は煙の中で、中心部には4個しか落ちていません。それでも、死者46名、中心ではそのうちの28名、全壊した家は371戸と被害は大きかったです。

爆弾が落ちたところは、家はもちろんのこと、土台の石まで飛んでしまっ、何も残りませんでした。落ちた跡は直径10間の深いスリ鉢状の穴が掘れてしまっ、それはひどいものでした。とにかく、爆弾が落ち、爆発した瞬間は何もわかりませんでした。私は2階から階下へ落されましたが、このことすら気づきませんでした。

私は爆発後すぐに町内をめくりましたが、町内には誰一人として人影はなく、まだ誰れも防空壕の中にこもっているようでした。その後私は人を集めて防空壕の中に閉じこめられていた人達を助けました。菓子屋の母子3人が爆撃で家が倒れたため、防空壕の中に生き埋めにされてしまいました。ところが爆弾の熱で倒れた家が燃え出したので私は火を消そうと水をどんどんかけたため、母親が「雨がゆめかわらないが、水がどんどん流れこんでくるから、私はここで死ななくてはならない」と子供2人に言ったということです。また台所から水といっしょにキャベツが流れこんできたので、そのキャベツを子供にやって、「これを食べてのがれるだけのがれよう。これで我慢しなくてはいけい」と子供に言い聞かせたということです。(救出後の母親の話)。



＜突き刺ったままの爆弾の破片＞

那加の爆撃のさい、今尾氏宅内のサンゴ樹に突き刺たまま、今日に到っている爆弾の破片。那加震災の惨状をほとんどどめいた現在、貴重な資料である。

私らがこの8人を助けた時の、私らへの
ありがたみはたいへんなものでした。

この爆撃の最も悲惨だったのは、時
計屋の親子4人が防空壕の中で死亡し
たことでした。母親が子供1人を背負
い、2人を連れて防空壕へ入り、爆撃
を受けたわけです。父は兵隊にとられ
ていたため、蜂屋の実家に疎開して
いたのですが、一度家を見ておこうと帰
って来て、この空襲に会ってしまった
んです。防空壕へ入ったんだけど、
爆撃の破片や瓦・家などが倒れてきて、
防空壕の出入口もなにも無くなってし
まったんです。「気をつけなくては
いかなぞ、スゴブを仏にあってんじ
ゃないぞ」といってそこを驅ってゆくと
「あ、あるある」ということになっ
たので、「大事にしないかなぞ」とい
って囲りを壊させた。ところが、母が子
を背負って死んでいるために、子供の
死体を出すことができず、ナイフでい
っけ筋を切り、外へ出すことができま
した。こうして先ず8人の子供を出し、
最後に母の死体を出しました。すると
母子の間に貯金通帳のあった包みがあ
りました。囲りを見物人が多くいて、みんな手を合わせ拝んでいました。それだけでも
仏はうかばれました。死体は近所に親類がないので、死体安置所へもって行きました。
それは悲惨なものでしたよ。その隣りのうどん屋で5人が死にました。その家で助った
のは弘法様へ行っていた老女と子供、それに兵隊へ行っていた父親だけでした。

防空壕以外で死亡した人では、国鉄那加駅で次の配給を受けている時空襲と重なってしま
い、ここ危険とあわてて南の市街地の方へ逃げたところを直撃を受けて即死した人
や、畑で仕事をしていた時に死亡した人などがいます。死亡した人の葬儀は全て町葬で
行なわれました。

那加4町内での死者は次の28名です。

本町一太田金内と家族4名、日江井浜夫妻と家族2名、今尾まつ子、片岡とし子、富田
木の田町一飯井よしと家族2名、杉山はる美と家族5名、田島(門前町の米屋)
家天地一佐々木松太郎と家族2名、岡崎賢と家族1名、長谷川(畑の中で) 新加納
今尾代吉(畑の中で)

—今尾氏のノートより—



＜今尾氏と自作の記念碑＞

那加爆撃直後、この記憶を永くのものとするため
今尾氏が自ら刻み、建てられた碑。この碑には運命
の9時40分がはっきりと刻みこまれている。
(那加西野町の神明神社境内)

本宅、軍事施設を目的としていた各務原空襲で、なぜこのような市街地が爆撃されたのか。こ
の疑問に対し今尾氏は「よくわからないけれども、後に聞いたところでは長森の六八連隊の裏に
前一色山という小山がありますが、当時そこに連隊の高射砲陣地がありました。そこから射った
弾が飛行機に命中したため重い爆弾を持ちこたえられず、川崎で投下すべきものを少し早めに投
下したため、那加に落ちたということです」と語られた。しかし今尾氏も語っている通り、これ
が事実かどうかは疑がわしい。6月9日に艦載機1機を撃墜したことは前城西野の加藤嘉雄氏の
たしかな記録と証言があるが、高空を飛ぶB29に高射砲弾が命中した可能性は、多くの人の証言
からは考えにくい。たしかに後に述べる川崎区や中小屋が軍事施設にきわめて近接しているの
に対し、那加駅前市街地は若干離れているが、当時すでに都市爆撃は日常茶飯事になっており、軍
事基地周辺の民心かく乱を免れて故意の爆撃を行なったと考える方がむしろ自然であろう。

2. 攻撃目標の渦中にいて — 川崎工場の場合を中心に

1917(大正6)年、各務原飛行場が建設され、西に飛行一連隊(大正11年移駐)、東に飛
行二連隊(大正7年移駐)そして飛行場中央付近の北側に航空廠があった。しかし戦争の激化に
より、両連隊は昭和17年、外地に移駐し、その連隊跡には航空整備学校、飛行学校、航空教育
隊、養成隊が設立された。この日の空襲では西にあった飛行教育隊、西整備学校は全く爆撃を受
けなかった。しかし航空廠と飛行場に隣接する川崎航空機工場、三菱重工組立工場は重要な目標
として意図的に爆撃を受けた。

イ) 1週間燃え続けたガソリンタンク——航空廠の場合

陸軍航空廠各務原支隊は航空本部補給部が発展したもので、川崎航空機、三菱重工で製作され
た飛行機の検査、修理および輸送などの仕事をこなしていた。廠員はほとんど軍属で約5000
人、また昭和19年以後は女子を含む約3000人の学徒がこれに加わり、計約8000人の工
員がいた。したがって、ここに対する爆撃は激しく、多大の被害を出し、航空廠にあったガソ
リンタンク(10万口)は1週間近く燃え続けたという。しかし、行く連の数量不足のため、この
空襲に関する詳しい証言を得ることはできなかった。今後の調査に待ちたい。

ロ) 巻きあがる黒煙、逃げまどう勤労学徒——川崎航空機工場の場合

川崎工場は1937(昭和12)年8月、神戸より蘇原村へ航空機組立部門が移転してきた時
に始まり、陸軍航空機生産の中核として、軍部進出とともに発展し、全陸軍航空機の25%を生
産した。戦争末期にはこの工場以外にも、岐阜市内に4ヶ所(大日本紡績、富士紡績など)、一
宮に1カ所の分工場を建設し、学校・岐阜市周辺の商店主ら徴用工を含む工員は本工場だけでも

※日露戦争後に北長森野一色に設置された歩兵第六十八連隊の工場のこと。※空襲中に常備される軍用機
※※※軍人でなく、軍に所属する文官 ※※※※※臨時労働力確保のための一般徴用工のこと。

3万人、各分工場を含むと実に5万人に達していた。当時主にはキ-45（二式双発復座戦闘機・通称「屠竜」）キ-48（九十九式双発軽爆撃機）、キ-61（三式戦闘機・通称「飛燕」）、キ-67（双発爆撃機・通称「飛竜」）、三菱より転機作成）、キ-100（五式戦闘機）、キ-102など、岐阜工場だけで約8400機生産されていた。しかし、B29が本格的に本土空襲を開始したところから、県内各学校の工場化、地下工場（瑞浪戸狩山）建設などの工場疎開がすすめられ、逆に生産を低下させることとなった。また、学校、徴用工の不慣れな仕事では作業能率もあがらず、質の悪い飛行機を多く生産する結果となった。

この日、工場内に空襲警報が鳴ったのは9時頃だという。この警報を聞いて全員が赤星山や村近の竹藪に避難しはじめ、またある者は木曾川方面や関方面まで逃げていったという。しかし、広い工場であるうえに、8万人の工員が同時に避難するわけであるから、逃げ遅れた者もいたようであった。この空襲の時、工場外に避難せず、川崎工場の本館内にいた、土井武夫氏（当時の川崎工場試作部長）は、その時の模様を次のように語る。



◀飛燕（上）と、五式戦闘機（下）▶

いずれも、文芸春秋「世界の傑作機」より。

◀爆弾、鉄筋の本館を買通す▶

岐阜から会社に出動すると、空襲警報が鳴り、8万人程の従業員全員が逃げることとなったが、私は当時試作部長をしていたので、15名程の職員とともに本館（名鉄三枝野駅北側にある）に残った。玄関より西へ10メートル程の所に避難用の地下室が作っていたが、もうどうするともできないという状況になって、私達はそこに逃げこむことになったが、8名だけが屋上のコンクリートチューブで作られた監視所に入って爆撃の模様を地下室へ報告していた。

爆弾が落ちると、大きな爆発音と共に建物がアワーンと鳴り、あたり一面にほこりが落ちて来た。後から調べると、本館の中央より東へ10メートル程の所に落ちていたのだが、爆弾は3階から1階まで貫通し、さらに幅10メートル、深さ5メートル位の穴が掘れていた。それ程強力なものだった。そのため本館は3階の建物だが、それを修繕した現在の本館も東半分は2階までしかない。このような強力なものであったが、構内での死傷者はなかった。

ところで、地下室にいれば、ゴージーという音がし始めた。何事かと外に出てみると会社の平屋の建物が燃えていた。また、その奥で本館2・8階にあった椅子や机が燃え始め、私達はその消化作業をずっとやることになった。しかし、水は少なく、手押ポンプでは作業もはかどらず、やっと鎮火したのはその日の午後11時過ぎだった。

その後4日おいて又やって来たが、今度は本館ではなく、工場や飛行場の飛行機をねらったらしく、小型の爆弾を多く落下していったようだった。

この川崎工場への空襲を工場から1キロ程離れた蘇原町兼田で目撃していた河合敏郎氏は、次のような手記を寄せられた。

◀一面火の海、黒煙の空と化する▶

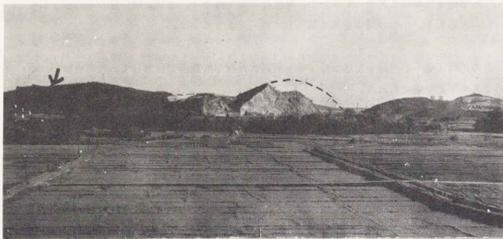
その日は空襲警報が出て、琵琶湖上空を通過中のラジオ放送の直後にはもうB29の編隊が頭上に来て、爆弾投下を始めました。見ていると鳥が糞でもする様に武山の爆弾がゴロボと飛行機を離れ、それがザーと雨の降る様な音と共に下に来るほど広がって、飛行機の進行方向に放物線を描いて、工場群に落下してゆきました。と同時に、大音響と共にもうもたらぬ黒煙が上ががり、あらゆるものが吹き飛ばされ、一面火の海、煙の空と化しました。1キロ程離れた所にいた私なども強い爆風を受け、家は戸、障子はあけ放してありましたが、障子等はほとんどはずれてしまいました。その後数分して編隊の第2派が来たように覚えてます。私の友人も1人、工場東の道路で死にましたが遺体確認ができず、友人の氏名のついたゲートルの足のみがやっとながらでました。

同じく、当時の蘇原町役場に勤務していた梶浦義信氏も、同役場屋上の監視所でこれを目撃した一人である。岐阜日日新聞47年7月17日付の特集記事「岐阜大空襲(6)」は梶浦氏の次のような語を載せている。「B29群が襲う前に艦載機数機が各務原、蘇原、三枝野地区の上空をかすめた。『敵機突撃』を屋上から叫んだが、みんなからははなとうにされなかった。まだまだ……という気持ちだが、住民の心の片すみがあった。那加方面から突いて各務原、三枝野地区が猛爆を受けたのはその後だった。川崎航空機の本館、飯塚群が宙に飛んだ。『バリッ、バリッ』と機銃掃射と1トン爆弾が川崎工場の北方にある川崎山・赤星山山ろくの防空壕を直撃したらしい。あとからわかったのだが、そこに死体の山があった。」この時、B29は大型爆弾を工場内に4個、工場付近に2個投下し、工場は完全に破壊され、生産はほとんどストップしてしまっ。しかし、人的被害は3万名中63名と、名古屋の三菱重工、愛知時計の被害に比べれば少なく、し



◀爆撃後の本館（左）と現在の川崎重工本館（右）▶

本館は名鉄三枝野駅西北にある。写真真の左半分（東側）が2階までなの注意到。（土井氏の監修参照）。左の写真は川崎航空工業岐阜製作所編「慰霊碑建立記念」文集より。



〈最大の犠牲者を出した赤星山〉 1971年に蘇原東門（本校北部）から撮影。破線で示した山土採取中の山が赤星山で、今は完全にけずり取られ、消滅した。左端の山麓にカマコ型に小さく見える（矢印の下）のが砲体壕（P23写真）。右の川崎山との間に川崎工場の煙突が見える。

かも、この被害は工場内に出たのではなく、避難する途中や工場周辺の防空壕であった。中でも赤星山（P4地図、P10写真参照）の被害は最大であった。川崎工場の北東にあるこの山には川崎工場の防空壕が埋られてあったため、多くの学徒、工員が避難することになった。この山にも1発の爆弾が炸裂し、ここだけで37名の死者を出した。この死者の中には難労学徒も含まれていた。当時、市立岐中（現、岐阜北高）の学徒として動員されていた等峰一氏はその時の模様を次のように語る。

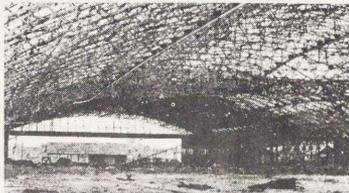
〈電線に人肉が……〉

私が川崎航空機へ動員されたのは、20年の4月ころでした。その時私は中学8年で、毎日弁当を持ち、電車で通っていました。私達の仕事は、当時各務原線のガードの北側にあった第8全組の燃料関係の仕事で、タンクを取付けたり、パイプの接続をしたりしていました。工場の北東に小さな山（赤星山）があり、その山腹には多くの防空壕がありました。防空壕といっても簡単なもので、穴を掘り、その上に板を敷いたもので、小さなものでは1つに5〜6人しか入れないものでした。当時、空襲に備えた避難訓練が時々あり、私たちはあわてせず、そろそろ防空壕へ何度も足を運んだものでした。最初の空襲は、たしか6月22日だったと思います。私達が出勤するために三輪野のホームに降りたとき、B29の巨体が頭上をゆうゆうとくすくす飛んでいるのを見ました。（後で考えてみると、爆弾投下を済ませて飛び去る飛行機であったようです。）私達は咄嗟に「これは本物だ!」と思い、本能的に防空壕をめざしていちもくさんに走りました。赤星山の西にある他の近くに来た時です。トタン屋根に大雨が降るようなザーという音がしました。爆弾が落ちて来たのです。私は咄嗟に道と畑の間にあった

※名古屋市熱田区にあった。6月9日午前9時半から午前10分間に1トン爆弾13発を含む278トンの火薬が炸裂し、2000人を殺す犠牲者が出た。

溝に転がり込み、日頃の訓練で指示されていたように、鼓膜が破れるのを防ぐため耳を親指で押さえ、目が飛び出るのを防ぐため残りの指で目をおさえ、大地の震動で内臓が破裂するのを防ぐため、腹を地面から離してうつぶせになりました。と同時に、ものすごく心地悪くなりました。この爆弾は他の東の防空壕に落ち、直撃を受けた防空壕は跡形もなくなっていました。後でよくみると電線に人肉や服の切れはしが引っ掛っていました。なぜ防空壕のあり場所を米軍が知っていたのか、という事ですが、あの時まで私達は空襲の恐しさというものを全く知らなかったので、おそらく警報が鳴っても別にあわてず、いつもの通り蟻の行列のように防空壕に向ったのではないのでしょうか。だからB29はそれを見て、防空壕の位置を見定めたのだと思います。

空襲が終り工場に向うと、その途中の林の中には手が無かったり、足が無くなった多くの工員の死体が散らばっており、それは悲惨なものでした。工場は全壊ではなかったが、その横にあった大きな食堂が跡形もなくなっていました。見ると傍にスリバチ状の穴があいており、皆んな1トン爆弾だといっていますが、その爆風で丸ごと吹っ飛んでしまったらしいです。それを見た時は私も驚きました。工場の各所には空襲による火災でつぶがっていました。又、工場外の木材所のあるところから死体や運び出されているものも見ました。被害者の数ですが、私の学校では死亡者は一人もいなかったようですが、岐



〈骨組だけとなった川崎工場の一部〉 掲掲 P9左写真と同じ
破壊された川崎組立工場

卓単業の生徒が生き埋めになって死亡したということの後で聞きました。何人かまではわかりませんが、その日、工場は休みになり、私達は家に帰されましたが、鉄道はメチャクチャになっているので、那加まで歩き、そこから宿舎でなく家に帰りました。家族の者はびっくり自分が死亡したと思いついていたので、驚き喜んでたことを憶えています。この空襲は最初の空襲でしたが、その後は慣れたためか、人的被害は少なかったようです。また時々艦載機の攻撃を受けました。主に飛行場の飛行機をねらっていましたが、弾に当たって死亡した人もいたということです。各所に高射砲がありましたが、飛んでいた後を撃っているだけで、何にもならなかったようです。私は岐阜市の焼夷弾による空襲も体験しましたが、やはりあの爆弾の破壊力はそれとは比べものにならない程恐ろしいということを実感した次第です。

※その後の調査により、赤星山防空壕へ退避した岐阜3年生、4年生のうち、4名の犠牲者を確認。後出のIV章（P28）および、「これまでの歩みから」の項参照。

同じく、勤労学徒として川崎工場に動員された各務吉男氏（当時多治見中学校生）は、「川崎航空機岐阜工場被爆記」という手記を寄せられ、そのなかで22日の事を次のように記している。

＜B29を背に、ただひたすら逃げる＞

（前略）その朝はひっそり閑と静まりかえり、人影一つ見当らなかつた。一体休日でもないのにどうしたことだろうと隊伍を崩して話し始めた時、近くの防空壕のふたがいき、工場警備員が中から首だけ出してどなる。「もう10分前空襲警報が発令され、警備員以外全員避難しろ。敵機はこちらに向っているから直ぐ避難せい」。へえ、そうかええと、そう言われてもまだ切迫感のない生徒達がぶらぶら歩き始めた時、岐阜方向のそれ程高くない空を گذらぐたのエンジン音と共にB29、5、6機から成る編隊が幾編隊も幾編隊も、後から後から次々連なっていくこちらに向って進行してくるではないか。もう避難する時間もないから防空壕へ入ろうと近くの壕のふたを上げたり、生憎雨水がいつぱいたまっていたり入れない。困ったな、どうしようとか皆がうろろうし始めた時、Yが「あぶない、逃げよう、敵機は完全にこの工場を爆撃射程内に入れている」と叫んで走り出したので、それに付られて全員が敵機進行方向と直角に北に向って工場内を全力で走り始めた。工場の外へ出る間もなく爆撃の落下音が上空から聞えてくる。普段教えられていた通り、両手掌と親指で両眼、両耳をおさえて地面につく伏す。大地を轟かせ1トン爆弾のいっせいで連続爆発音、爆弾を落したB29の第1編隊が今頭上を低空で整然と通過してゆくところだ。（中略）起き上って走る、又頭上を通過する第2編隊、どうこうたるエンジン音と落下音。走る、ただひたすら駆けこぼつて走る。或る生徒は身を軽くしようと言ふ動物の本能からか、肌をしのぎがケットに入れてきた大切な炒り豆を無我夢中から幾度も幾度もつまみ出しては捨てながら走っている。或る生徒は足手まといのわらぞりくぬぎ捨てて走っている。もうすぐ岡の中腹にたどりつく。しかし、第三編隊からの落下音、身を山肌になすり付けるようにして伏せる。今度こそ我々が直撃されるのではないか、こみあげくる恐怖感、顔を少しも地面の中に入れようと鼻や頬を使って「グライヤイグ」をするように息をかき分ける。幾度も巻き起こる爆発音、やれ又助かったと今逃げて来た工場の方を初めて見おろす。何と、下の方には赤黒い炎も見え、あとは真黒な巨大なたつつきが幾つも幾つも天に向って物凄く勢いでぐんぐん昇って行くところだった。（後略）

「岐阜百年史」は「工場内で防空壕に入っていた生徒に犠牲が出た。大多数は北の山を越えて、関方面に逃げて助かった」と記し、岐阜高女の斉藤典子さんの次のような手記を載せている。

＜何か異常なあのときの心理＞

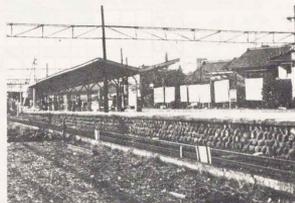
私は部品係りと進行係りの重任で、ほとんど毎日、三柿野の本工場へ。作業に専念する学友に部品のひとつも足りなくは申し訳ないとの責任感で「警戒警報」の中を本工場へ入った。本工場に目ざす部品がなく、分工場へテータ出かけた直後、本工場が空襲になった。ひとり、畑の中であおむけになって、B29の編隊をぼんやりながめていたら、小さなヘビがモンベにはいあがってきた。爆弾の落ちる地響きが伝わってきても案外に驚かなかつた。何か異常なあのときの心理。

そして爆撃後、散乱した遺体の処理にあたられた安田博氏（当時の川崎工場人事係長）は、この時の様子を次のように語る。

＜献身的な看護婦の活動＞

第1回目の空襲より1カ月ぐら前にB291機が偵察に来た。6月22日、ちよどど出勤する時間で、6時30分頃に空襲警報が鳴り出したために退避することになった。

愛知時計への空襲（6月9日）以前は東場死守の方針だったが、愛知時計の被害が惨烈を極めたため、遠隔退避ということになった。私はこの日、直直命令をやっていった関係で、直ぐ退避命令を出した。それぞれ防空壕なり、遠い所は関まで逃げた人がいたようだった。命令を出した後、私は防衛召集で鶴沼に行くことになっていたため、三柿野まで行き、電車に乗った。すでに敵の編隊が来ていたため、「これは、



現在の三柿野駅」四角の建物は川重本館の一部電車と飛行機との競争だな」と思った。二十軒まで来ると爆撃の音が聞こえ始めた、そのため電車は運転停止となった。乗客は全員左右の畑に逃げ出した。爆撃がすんでから西の方を見ると煙があがっていたから「会社がやられたな」と思い、鶴沼に行くことは、やめ、直接会社に帰ろうと思い、西へ歩いた。その帰り道、飛行機運搬用の道路の東寄りに爆弾が落ちていて、その付近の五、六軒の民家がやられていた。防空壕に入っていた人々は、出口の所へ水や土をふたをしたようになっていたため、出るに出来ない状態であった。その人達を助けるためにそこに駆けつけて、手で泥をすくって助け出した。会社に帰ると、本館から火が出て焼広がり始めていたが、水が無かったため、消火作業ははからなかった。

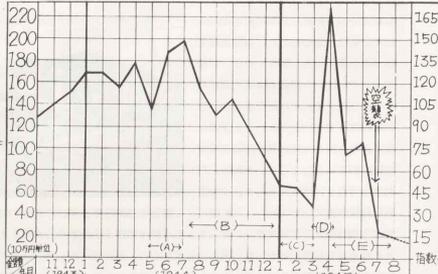
赤星山の防空壕で死傷者が出たという知らせを聞いたので行くと、37名ばかり防空壕の中で死んでいた。死因はそのままだ姿勢で死んでいたことから考えて、爆風であったようだ。手や足がバラバラになっている者は、当時の看護婦がアルコールでふき、胴と合わせて納棺した。看護婦は気が張っていたためか、そういう仕事を立派にやってくれた。廻り出した死者は三柿野の青年学校に収容し、身元が判明した死体は家族に知らせるなどの手続きをとり、引き取り手のない死体は寺で火葬にした。

梶浦義信氏も、役場職員として、その死体処理にあたった1人である。前掲した岐阜日日新聞の記事は、「苦汁をかむ思い」で話された梶浦氏の言葉を次のように続けている。「役場勤めのつらさで、その死体処理の仕事にあたった。『野天焼き』をせざるをえなかった。3メートル程の鉄の棒を二本並べ、その上に死体を並べて火葬した。内臓が焼け落ちて火が消え燃えにくい。遺族も残館な火葬に目を見むけた。戦火の取った川崎工場から重油を運び、燃焼時間を早めた。」また、前掲した河合敏郎氏の手記は、「家の近くの墓地で3日ほど、毎日次から次へとラ

ックで棺におさまった遺体を6体づつ運んで火葬にした。」と結ばれている。

以上のような悲劇をともないながらも、空襲を受けた他県の工場などと比べると、その死傷者の数は比較的になかったという点は前述したとおりである。これは土井氏や安田氏が語られたように、工場死守から遠隔回避に対応する仕方が変更されたためである。変更された理由としては、(1)空襲を受けたのが6月下旬と遅く、そのため他工場(土井氏によると同年1月に多大の被害を出した三菱の名古屋工場、川崎の明石工場)での甚大な被害に学んで変更する時間があったこと、

(2)各務原は都市ではなかったため、避難する場所が多くあったこと、の2点があげられる。しかし、もし工場死守の方針であったとしたら……考えただけでも恐ろしい話である。



ところで、物的被害はどうであったか。ちなみにこれを昭和18年10月から20年8月までの川崎工場の生産額グラフ(戦後発表された「米軍報告書」により作成)によって見てみよう。

(上記グラフ以下、(A)～(E)の記号はグラフ中の記号である。)

- (A) この間の増加は徴用・学徒動員による労働力の増加と戦時生産が強化されたためと思われる。
- (B) この間の生産減少は激化するB29の襲撃に対処できる有能機種にモデルチェンジするため、その種の生産に空白があったことと、航空機エンジン不足によるもので、このころ工場各所には360機ほどの首無し(エンジンとプロペラの無い)飛行機が並んでいたという。
- (C) この間の減少は上記の状態にエンジン工場であった明石工場が、この年の1月、爆撃を受けたことが重なったためである。
- (D) この間の1億8千万円にもほなる急激な生産増加はキ-100へのモデルチェンジの完了と、すでに大量に確保されていた労働力の結合によるものと思われる。
- (E) しかし、この急激な増産も5～6月にかけての工場疎開、組立部品の不足、そして決定的には6月22日、26日の爆撃および岐阜空襲による生産マヒによって、急激に落ちこむ(約1億7千万円)こととなった。そして川崎工場も終戦を迎えるのである。

※電重なるB29に対するため、その迎撃用として作られたもの。(P8写真参照)本機はもともキ-61(飛燕)のエンジンだけを取り換えたもので、キ-61と大きく異なるものではない。しかし設計は非常に苦心を要し、19年10月に着工され、翌年2月に初飛行試験が行われた。生産台数は378機。



〈キ-102 II、五式二重戦闘機〉

キ-100の性能を更に進化させてつくられたもの。20年9月から整備機を出す予定であったが、8月15日の終戦を迎え、実際に完成したのは、試作の3機だけで実用にはならなかった。

文林出版「世界の傑作機」より

川崎工場慰霊碑に刻まれている社員、工員の犠死者は次のとおりである。(部加の項でのべた今尾代吉氏のように工場外で犠牲になった人も若干含んでいる。)

小島 秋三	毛利 寿夫	野村 義雄	村瀬 秀夫
野村 正明	浅野新治郎	牧野 周一	奥村 一夫
長瀬 正夫	渋谷 重信	中島 宗太郎	杉山 貞雄
馬場 仁司	武井 鎮雄	丸山 稔	橋戸 一男
内田 弘一	松尾 善男	川口 参治	前田 ちあ
藤井 正二	小林 正一	林 進	岩田 久男
西 良作	林 保三	小坂 隆広	小関 豊吉
西尾 平吉	杉山 智	藤沢 秀治	安谷 支兵衛
東 隆三	青木 俊二	堀 末松	野原 圭吾
松波 克巳	輪 木 太郎	竹本 正徳	飯沼 半次
大坪 幹三	千妻 文彦	浅野 新太郎	小野 栄
後藤 一雄	大野 光夫	伊東 啓吾	浅野 留吉
西尾 正	今尾 代吉	古田 重雄	坂 正元
渡辺 修	安藤 和雄	林 又市	梶 恩夫
後藤 岩吉	古田 義三	輪 木 新一	



〈川崎工場慰霊碑〉

会社内の川崎神社に建立されている。

ハ) 三菱航空機組立工場への爆撃

各務原飛行場の東北に隣接して三菱航空機の工場があった(P4地図参照)。この工場は組立工場であり、名古屋工場で作られた飛行機が分解されてここに運びこまれ、再度それを組立て、整備し、隣接した航空廠へ送りこんでいた。この工場は5棟の格納庫、工場、事務所などからなり、動員学徒(約300人)、女子挺身隊(約70人)を含む1000名程の工員が就業していた。各地が空襲を受けたすと、この工場も疎開が始まり、朝沼羽場(木工部品、機体)、蔵原坂井(部品)、須南(燃料、機体)、那加(事務所、木工製品)などに分散した。そして工場の屋根には機関銃を置き、空襲にそなえていたという。この日の爆撃では、「川崎」同様全員が避難していたため、死傷者は一人も出なかったが、工場は全壊してしまった。そして、岐阜が空襲を受けるようになると、工員の出勤も少なくなり、終戦が近くなると、工場の物品が持ち去られるようになったという。

こうして三菱も、機能マヒのまま、終戦を迎えることとなった。

3. 飛行場 工場群隣接地域の悲慘

爆弾は工場や基地内に投下されただけでなく、その周辺にも投下されて多くの被害を出している。最初に述べた那加の場合がそうであったが、川崎工場の東側にある川崎区と、その東南の鶴沼三池南組小屋も激しい爆撃を受けた。

1) 身元が分からなかった多くの遺体——鶴沼川崎区の場合

川崎区は昭和17年4月1日に鶴沼(三ツ池)から分離独立した部落であり、川崎工場に近かったので、川崎区という名がつけられた。ここには、工場関係者を相手にした商店、旅館、下宿屋などが軒を並べていた。ここに5個の爆弾が投下され、性善さんの家僚が破壊されて、山道にも2個投下された。「鶴沼町史」によれば、この日だけで50名の死者を数え、また三柿野駅で待避中の乗客も多数爆死したという。

この時の模様を、当時から川崎区に在住の仙石清弥氏は次のように語る。

〈ザーッ、ドンという音と共に〉

9時8分ごろでしたかな、警報発令になって、ちょっと見たらもう9機編隊で並んで来よるんですよ。これはいかん、ということで家中の者が裏の防空壕に入りました。

私達が入ったと同時にザーッという音がしました。私は防空壕の中から爆のフタを持っていたんですが、「ザーッ、ドン」という音と共に、フタを取られてしまい、服のポケットのところに穴があき、腰のあたり



〈爆弾の破片〉

仙石氏が今も大切に保管されている川崎区に投下された爆弾の破片の固まりで、重さ34.5Cm。

も破れ、腰が出てしまいました。爆撃の後、外へ出たら土埃で一杯でした。家は完全に吹飛んでしまいました。私は防空壕で命拾いをしました。家の近くには川崎の夜勤の方が泊っている下宿屋があって、そこから「助けて、助けて」というのです。家には火がついて燃え上っていました。なんとか機でこじあけて助けましたが、鼻血を出し、ふらふらとしていました。あとで聞いたのですが、その人はすぐ亡くられたという事です。それから周囲を回った男の人は出動していたためか、女の人と子供が多か

※当時川崎区に居住していた人のほとんどは川崎工場等に勤めていた人であり、地元の人の多くは疎開していません。身元不明の多くの遺体が出たのはそのためです。※※このことについては未調査。

たですね。すでに死んだ子供を抱えた母親が虫の息でいたのも見ました。しかし、なんともしよがなかつたですね、おれわれとしては。そりやあみじめなものでした。手が一本、足が一本というように、あちこちに散らばっているんですね。そこに居た人達とそりした9体の死体を戸車に乗せて竹林寺という寺へ持って行きました。寺の方でも、そんな持って来てもらっては困るという状況でした。

また、当時川崎区に在住し、翼賛会推進委員であった中野梅雄氏は、この日の数日後次のように美しいエピソードを見聞する。

〈血まける副骨を遺骨がわりに〉

22日の空襲の時、私は川崎の工場にいたんですが、爆撃となって、北方に逃げました。第1波は高山線の南側を、続いて第2派は北側を襲い、私達が逃げる川崎山ちかくの道に爆弾が破壊しました。私は川崎山の裏の飯田あたりまで逃げ、そこにあった芋穴の中に身をひそめていました。第3波は第1波と同じく高山線の南を爆撃しました。

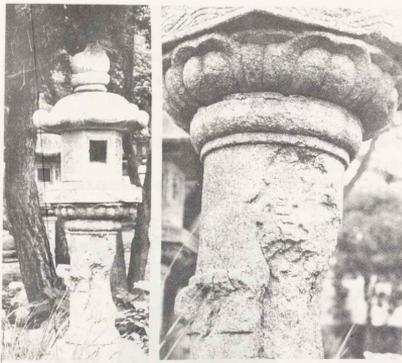
この爆撃を聞いて、郡上から御両親が川崎で働いていた息子さんをさがしてみえたくてですが、その息子さんが下宿していた所も全壊でした。それで、倒れた家の上のたる木や天井板をはずして、息子の部屋を調べると、カヤを吊った跡はあるけど、息子がいなかったんです。床に副骨があつたね、それが血まるけでした。お母さんが、「息子が寝かえんようにと私が編んでやったやつや。こんなに血まるけでは、おそらく生きていないだろう」と言って、それを遺骨がわりに持って帰られてね。それが本当に哀れでした。この息子さんが亡くられたのは名鉄三柿野駅の側にあった長屋でした。私達は二十軒長屋と呼んでいました。川崎区で死んだ身元がわからない人は墓石もなく、その後どうなったか、全くわからないうです。またそれは軍の秘密で、当時正確には何人亡くられたかは知らされていません。ともかく、死傷者の多くが徴用や学徒動員などで他から来た人達であったことは、いけい哀れな気持ちにさせられましたね。



〈穴があいた石碑と鳥居〉

川崎山の八幡神社は今も22日空襲の傷跡をよくとどめている貴重な資料である。空襲後、鳥居には無数の鉄片が突き刺さっていたという。

※大政翼賛会のこと。第2次大戦中の官制的な国民統制組織として1940年10月結成。既成政党を解散。首相を総裁として全国に支部を置き、町内会なども指導下ににおきた。



＜脚をもぎ欠かれ、散乱した燈ろう＞

今もなお視覚で知ることができる資料として、このままの状態での保存が強く望まれる。(前ページと同じ、八幡神社境内)

先にふれたように多くの遺体はだびに付され、墓石はなかつたが、多くの人の尽力によって埋葬された。しかし、数日間放置されたままの遺体もあった。当時、川崎区の北西に川崎工場の下請製材所(現在の岩戸自動車付近)があり、多くの朝鮮の人達が働いていた。爆撃の時、避難できなかったためか、20名程の死者を出した。しかもその死体は4日間そのまま放置されていたため、腐敗し、その死臭があたりをおおっていたという。(中野梅雄氏談)

ロ) 直撃のすさまじさ——小屋の爆台

名鉄二十軒駅からしばらく南へ行ったところに、通称、中小屋と呼ばれている鶴沼三池南組がある。現在は県道江南・関原をへだてて自衛隊基地が西に面しただけだが、当時は現東道の西に残っている旧道のトンネルの上を通過して東へつながり、中小屋の南へ基地がのびていた。また北側には2000人の隊員をかかえた養成隊(P22参照)の建物が並んでいた。さらに、この付

岩日韓併合から大量に押入してきた朝鮮人は第2次大戦中の労働力確保のため各地の鉱山や工事現場などで強制労働させられ、多くの犠牲者がでた。ちなみに中国人も大勢から強制連行され使役された。各務原も夜役等の一部が長野県の工事現場から学が堀や須南に運ばれ雑居寮とそこへの誘導路づくりをさせられた。毎度の朝食や昼時分労働などのため、終戦前後に26名の中国人犠牲者がでた。いま学が堀池を見下す山中に殉難碑(右の写真)が建っている。



近一帯にあった竹藪の中には飛行機などが隠れてあった。このため、この日はもちろん、4日後の26日の爆撃でも被害を出したし、その後の機銃掃射の対象にもされた。

この日、中小屋では直撃された家が多く、無傷の家は一戸もなかった。この時の模様を板井寛南氏は次のように語る。

＜ばらばらに散乱した遺体＞

初めての空襲は6月22日の朝でした。その日は天気の良い、曇り日でした。警戒警報の後急に空襲警報が鳴りだしたので空を見ると、すでに竹藪の上にB29が来ていました。あわてて家から貴重品を持ち出し、防空壕に逃げこわいなか、「ドカーン」という音がして、あたり一面が真暗になりました。空襲が終わって外へ出てみると、私の家は壁が倒れ、燃え上っていました。しかし、井戸もやられ、つるべも使えず、水が無かったため、2昼夜燃え続け、24日の大雨でようやく消えました。この部落80戸中、被害のなかった家は1戸もな、4戸が全壊しました。死者も多く、私もこの日母を失ないました。母は爆弾の破片で負傷し、軍の医療室へ運んだが助かりませんでした。なかでも気の毒だったのは、全壊した文左衛門さんのところでした。東京にいた長男の縁が訪ねてきて、あいさつを交すいともなく、飛びこんだ防空壕で直撃を受け、吹っ飛んでしまいました。そりゃ、見るに見えん、言うに言えん哀れなものでした。あそこ木に背中がらよって、こっちの木に着物の切れはしは、足首が畑にころがる、というありさまでした。家に残っていた文左衛門さんは倒れた家の梁にはさまれ、助け出されて医療室に運ばれたが、こと切れました。家にいなかった息子3人が災難をまぬがれたのが、せめてもの救いでした。

＜現存する戦前の遺物——給水塔＞
中小屋集落東前にある整備学校跡にも残る給水塔。



部落の北には陸軍の養成隊がありました。子供たちのことですから、北へ南へと逃げまどい、南の私たちの部落の方へ逃げた者は多くが直撃を食って死亡し、竹藪の横の溝の中には多くの死体がありました。こうしてこの日、22個の爆弾が炸裂し、その跡には大きな穴が残りました。

以上に紹介した川崎区・中小屋地区の他にも各務原駅前周辺も被害を出したが、はく達としては未調査である。

こうして、悪夢の22日は終わった。先に紹介した各務吉男氏は、その手記で、22日の事を次のようにしめくくっている。

各務原陸軍航空廠養成隊は、鶴沼三池地区に設けられ、昭和15年4月に第1期生約2000人が入隊した。岐阜県を中心に、三重・静岡・滋賀・石川・富山などから集まった高等科卒業生らで、全員寮に入って生活を共にしていた。昼間は普通科目を受講し、半日は教練などに費やされたが、週3日は航空廠へ出向いて飛行機組立・旋盤・溶接・製図・発動機などの実習にあたった。1年の課程を終えると約1割のものが幹部講習を受ける3年課程へ進んだが、大半は航空廠や他地区の関連機関へ配属され、そのあとへ2期生約2000人が入隊した。こうして終戦の年入学の5期生まで続いたのだが、末期には学科教育どころではなくなり、隊内や航空廠をはじめ、周辺に分散疎開した工場へ一部昼夜交代制を含め勤務していた。(以上、1期生で3年課程へ進んだ各務の長瀬京二氏の説明による)

養成隊は航空廠の東、中小屋集落の北にあった。22日の空襲は隊の中心部をそれ、先の板井寛衛氏の証言にもあたり、南の中小屋方面へ待避した生徒が竹藪で犠牲になった。そして、26日の空襲で壊滅的打撃を受けることとなった。当時から三池に住み、川崎工場の工員だった伊藤正次氏は次のように語る。

26日は、いち早く木曾川へ向って逃げましたが、ふり返ると、北方にものすごい砂塵が上っていました。あとから帰ってきて、死体を何杯ものトラックに積上げて運び去るところをこの目で見ました。

養成隊には当時約2000人いましたが、次の3ヶ所から多くの犠牲者が出たようです。

北門付近には衛兵24名がいたが、彼等とはえ空襲であっても部署を離れることが許されず、全員死亡したとのことで、東南にあった格納庫で作業していた者も多くやられました。また、夜勤を終えて寝ていたものも退避が遅れ、つぶれた建



◀ 現在も残存する養成隊の礎石 ▶

物の中で死んだものもいました。何日かあとで壊れた建物の中へ分け入ったら、未処理の死体がありました。とにかく、この日の爆撃で養成隊の建物はほとんど倒壊してしまいました。

※国民学校 (P25 戦任務) 6 年の上におかれた 2 年課程の教育機関。現在の中学 1〜2 年に相当。

この日、一部は飛行場、川崎工場等工場群から約 10 キロメートルも離れた所にある農村、鶴沼山崎地区 (表紙裏の地図参照) にも投弾した。当時から山崎に在任の丸山茂氏はその時の様子を次のように語る。

◀ 遠避した山中に ▶

空襲だということで、9 時ごろ祖母、母、兄、それに近所の人と共に裏山へ逃げました。防空壕はあったけれども、暗くて湿気臭く、私は入るのがいやでした。山の方へ逃げたのは防空壕へ入るよりも安全だと思ったからです。その山には自動車が行ける道があったため、軍事物資が隠してあると思ったのでしよう。B29 の 8 機編隊が 10 分間隔くらいで飛来し、9 発の爆弾を投下しました。私は目と耳をふさぎ、地面にふさりましたが、機関銃の弾が爆弾の破片がどちらかはわかりませんが、私の横腹をかすっていたことを覚えています。近くに母がいたのですが、心臓あたりに爆弾の破片を受けて死んでいました。即死でした。兄は手の関節を 3 分の 2 程えぐられ、手はぶらぶらになり、かかとの所に貫通していました。また近所の方は破片がバンドを貫通し、腹の中に突き刺さり、最初は「水がほしい」と言っていました。飲んだ水は全部あげてしまい、川崎病院へ運ぶ途中に亡くなりました。内臓が破裂してしまっていたのだと思います。爆弾の落ちた所は岩場でしたが、六畳間くらいで、深さが 1〜2メートルくらいの穴が空き、そのそばには、破片が突き刺った大きな松が倒れていました。その後山崎への空襲はありませんでしたが、グラマンが時々やって来ましたが。

※

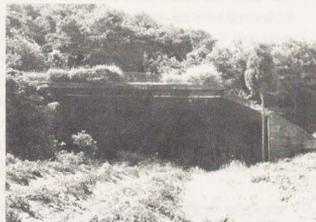
2. はじめての焼夷爆弾 - 7 月 12 日

山崎地区への爆撃でも明らかに、アメリカ軍の攻撃目標は飛行場・工場群から離れた周辺部にも拡大するようになった。空襲が激しくなるにつれ、各工場は山中に軍事物資を疎開させたり、山麓に掩体庫を作り飛行機を隠したりしていたが、これも爆撃されることとなり、山麓の集落も安全ではありえなくなった。

岐阜の市街地の大半が焼夷爆弾で焼きつくされた 7 月 9 日夜から

◀ 掩体庫 ▶ 各務山の一角に今も残っている (P10 写真参照)

ようど 8 日後の 7 月 12 日の夜、4 7 機の B29 が岐阜市白山町、長森方面を爆撃した後、各



※ 1 万機以上生産されたアメリカの艦上戦闘機。最大時速 579 km。

務原北部へ向い、蘇原や須衝に100ポンド焼夷弾を投下する。投下されたのが、これまでのものは全く違う焼夷弾であったため、この日の被害は主として家屋の焼失であった。蘇原伊吹町に在住の金武有一氏は、この時の模様を次のように語る。

＜バーと砲弾が飛び散り……＞

7月12日の午後7～8時ごろ警戒警報が鳴ったので、和服から洋服に着替えて防空頭巾をかぶり、雨戸を閉めて外へ出ました。井戸水を汲み上げて桶の中に入れていた警報解除になったので、和服に替えて床に寝ていました。10～11時ごろ突然空襲警報が鳴ったので、「それノ」というので外へ出ると、すでに大鳥の方で炸裂音が聞え、B29はこちらに向って来る様子でした。どうしてこんな所へ飛来したかという事ですが、これはあとから考えたことですが、当時裏の加佐美山に川崎の飛行機資材が隠してあったから、それを破壊しに来たのだと思います。岐阜空襲の場合は小さな焼夷弾でしたが、この部落は1メートルもある「焼夷爆弾」というのが投下されました。11戸の家がこれによる被害を受けました。私の家だけでも計14個落ち、その多くは不発でした。私の家は母屋の一部と、土蔵と長屋が焼けました。当時私の家には岐阜から姉が子供をつれて強制疎開しておりましたが、いよいよ来るとなると家には長女と私だけ残り、女子供を裏の山へ逃げさせましたが、その山が攻撃目標であることを後から知り、よくまああんなことをしてしまったと思っています。爆弾が落ちた時は、バーと砲弾が飛び散り、燃え出しました。当時私の家には軍の毛布が沢山置いてあったので、それを燃すわけにはいかないし消化しているところ、光泉寺に寄宿していた兵隊が来ました。その消化作業を全く手伝うとはしませんでした。「頼むから手伝ってくれ」と言っても、「あかん、あかん、僕らには別の任務がある」と言っても、目の前で燃えているのを見て水一杯もかけてくれぬのですから、お粗末なものでした。

私の家の隣りに陽徳寺という寺があります。ここが一番の毒でした。この寺は全てが家屋が全焼し、防空壕に入っていた子供が爆弾を受けて死にました。当時寺には兵隊が寄宿していましたが、空襲になると命大事と先に逃げ出したのは驚きました。私の家に来た兵隊の態度や、この兵隊などの姿はそれまで私が持っていた軍隊観を大きく変えました。

私の部落の他では、寺島にも多く落ちましたが、ほとんど不発で小学校の一部を焼い



＜都市空襲に使われた焼夷筒＞ 本校高木學務長提供。



↑
吹き流しより弾頭が下になり、地面にぶつかる衝撃で炸薬が爆発することにより、燃えた焼夷剤が周辺に四散する。なお一個の焼夷弾に36個の焼夷剤が入っていた。伊吹町に投下されたのはこれとは別のものである。

たくりでした。他に、東島1戸、持田2、3戸、須衝2、8戸であったようです。この日は雨まじりの天気で、被害の拡大を食い止めることができたのだと思っています。

3. 突如のねらい撃ち — 戦闘機による断続的機銃掃射

先に述べたように、6月以降各原は連日のように戦闘機による銃撃を受けている。戦闘機は小廻りがきく上、ねらった目標にめがけて急降下し、正確な銃撃を加える。しかもB29の来襲の場合と異なり、空襲警報が鳴らない場合が多く、突如あらわれ、一瞬の内に覆いかぶさるようになり接近して来て機銃で乱射する。ほとんど地面に伏せる間もないくらいである。戦闘機の攻撃目標は主に飛行場であったが、工場・航空廠も襲われ、6月2日に三菱重工業で1名が亡くなっているが、B29の空襲にくらべて被害はわずかであった。また戦闘機の空襲の場合、はじめは日本軍の反撃もあったようで、6月9日1機撃墜している。だが、被害の状況はつかみきれない。それは空襲が個別のものであり、被害が地域的にも時間的にも分散しているためである。しかも、攻撃は軍事施設のみに加えられたのではなく、周辺に集落も加えられた。ぼく達がつかんだ被害件数は、前夜(まえど)の老女1名、各務の親子2名、稻沼東町の1名などがあつた。この人達は畑で仕事をしていたが、道を歩いていた時に銃撃を受け亡くなった方々で、非戦闘員であった。

当時中学の勤労学生員で各原へ来ていた、映画監督の藤田正浩氏は、昨年5月9日のNHKテレビ番組「東海・北陸」の中で、この機銃掃射について次のように語っている。



＜機銃掃射に使われた焼夷筒＞ 桜井寛昭氏提供

＜白いマラーをびかせて＞

グラマンとかロッキードのものすごい戦闘機がね、機銃掃射をはじめるわけですね。すると彼等は滑走路すれすれにきやがって、パイロットがわれわれの防空壕から見えるんですよ。やつらね、白いマラーをびかせて、カッコいいんですよ。それがわれわれの方へパシューッと向ってきやがってね、機銃掃射するわけですね。大木にその弾が突入しますとね、入った口はほとんど見えないんですけど、出たところはほとんどにパカーッとね、えぐられてるんですね。あんなの食らったら、たまったもんじゃありませんよ。

また、蘇原六軒の国道端の自宅で療養生活をおいていた山本義氏(股大教授・岐阜空襲を記録する会会長)も機銃掃射の体験者である。警戒警報もなしにいきなり空襲警報がでて、入っていたトイレから飛び出した途端にグラマンが見え、アメリカ兵が見え、パリパリと来たという。あとから見ると、トイレの壁に数発貫通していたという。そして当時、蘇原国民学校3年であつた。

※「藤田正浩ふるさと行く」という番組で、ぼく達の活動の一都も紹介された。
※※1941年国民学校令により小学校を戦時教育のため改組。「皇国民」の模範が目的であった。

た坂井浩雄先生（郷土研究部顧問）も、下校途中の路上で奇襲されて桑畑の中に伏せ、命拾いをした一人である。

こうして、20年6月2日の大空襲以降は昼夜の別なく鳴り出す警報と、突如撃ってくる艦載機への不安・恐怖に多くの住民は心身ともに疲労しつくしたという。しかし、川崎工場を中心とする各工場ではその後も憲兵が見守る中で作業が継続されたという（この点に関しては「『原各務原への勤労学徒動員』を参照）。多くの住民、工具は空襲に備え、防空頭巾で頭を包み、胸には住所・氏名・血液型を書いた「認識標」を縫い付けていたという。防空壕も、まして防空頭巾も、1トン爆弾や機銃掃射には気休めにすぎなかった、ともいえる。工場には棺かけが準備され、そして惨死を前提にした「認識標」を胸に、生きていた人々。それが30年前の各務原の姿であった。取材活動の中で、「サクになってか、2、3人の工具が燃料になるイモ焼酎を飲んでいたのを、憲兵に見つかつて引っぱられていった」という話も聞いた。

「戦後」と思い込まされていた空襲下の各務原住民、そして工具は、実はまきれもない、それも無防備同然の「最前線」に立たされていたのである。

そして、20年8月15日、戦争は終わった。前日の14日ギリギリまで続いた空襲も、これで終わった。川崎工場に学徒を引戻した岩見国太郎氏（P30の証言参照）はこの日の玉音放送を、「ああ、これで学徒も救われる、うれしい、万々才だ」という思いで聞いたという。

やがて、戦地から帰って来た由良逸雄氏の目に映ったものは、次のような光景であった。

小生は当時北支那天津の飛行隊に勤務していて、終戦の年、昭和20年12月1日復員してきましたが、まだ空襲の跡がそのまま残っていて、現在の岐阜基地一帯は爆弾の穴が到る処にあり、飛行機の残骸が山と積まれて、米軍が戦車でみつぶして処理していました。（郷土研究部アンケートより）

中屋に帰った由良さんは父に再会する喜びを味わうことができなかった。父は6月2日の「大空襲」の犠牲者の一人であったからだ。いうまでもなく、これはひとり由良さんだけの体験にとどまるものではない。



※三菱航空機組立工場に勤務していた山内元氏氏の証。

IV 各務原への勤労学徒動員について

1. 動員への動き

昭和16年11月、緊急産業部門における労働力不足を補充するため、「国民勤労報国協力令」が公布され、全国に勤労報国隊が組織された。そして国民総動員体制の開始とともに、県下各地でも卒業生を中心に報国隊が結成され、要する動員が開始された。

しかし、拡大する戦争のため、労働力供給に追いつけず、ついに年若き勉学の徒である中学生・女子学生も時代の波をものりかぶり始めた。昭和18年6月25日閣議は「学徒戦時動員体制確立要綱」を決定した。これは本土防衛のための軍事教練と、勤労動員を徹底させるものだった。同年7月18日学徒に「勤労動員」が発令され、県下各中学校・女学校・実業学校の在校生の動員が開始された。

動員の初期は雑体塚づくりや雑事が仕事の中心であったが、やがて本格的な軍需物資の生産ももちろんのこと、あらゆる産業に波及し、学校工場化も多数にのぼった。全ての機能が戦争へと埋没していった時代である。

2. 動員の実態

動員の様子は各地の高等学校の記念誌などに記録されている。それらを各務原方面を中心に追ってみたい。

＜昭和18年＞

当時、県下の各女学校の同窓会が寝って女子挺身隊を結成した。第一回女子挺身隊の多治見高女隊20名の一人としてブラスバンドで選られ、川崎航空機へやってきた長谷川千穂さんは、多治見女子高の「創立五十年誌」の中で次のように述べている。

川崎航空機では、県下の各女学校から集まった人達が、これからの生活がどんなことになるのか皆不安面持てた。しかしその夜からは、肌に触れるとゾーと冷たいあのスフのせんべい布団と寝食を共にする生活が容赦なく私達を待っていました。そして、終戦までの約2年間、庶しくも、うつろな工場生活が続くことになったのです。



＜動員服装の多治見高女生＞

多治見女子高「創立五十年誌」より

卒業生ばかりでなく、間もなく在校生もかり出される。「岐歳七十年史」には次のように記されている。

飛行機を空襲から防護するため、広い飛行場の隅に一機ずつ分散配置させ、三方に8～4 mの高さの土手を築き収納することになり、岐阜地区の各中学校に割当てられた。本校の受持ちは各務原線六軒駅から南東に徒歩10分くらいの所だった。作業は簡単で周囲の土を掘ってモッコや担架、草蓆などで盛り土をしてゆく、全くの入海戦術によるものだった。数回の出動で大体完成したように思う。ついに役に立ったという間は聞かなかった。

＜昭和19年＞

この年になると、学徒動員が通常実施となった。「岐歳百年史」によれば、岐阜中学では4月10日、5年生は航空廠へ、4年生は川崎航空機へ動員され、9月には8年生が航空廠に配属されて、航空機のエンジン分解洗浄に従事させられるようになった。はじめは週1日の登校日があったが、じきになくなり、さらに昼夜3交代制で夜勤も始まったという。

戦争の激化にもない、動員も一段と多くなったが、各務原方面への動員（調査済の分）について下記にあげる。

- (4月) ○武義中学——川崎工場へ約400名(8年) ○本巣高女——川崎工場および分工場へ約300(8・4年)
- (5月) ○本巣中学——川崎工場へ(4・5年)、分工場へ(8年)計217名
○岐阜第二中学——航空廠へ(3・5年) ○恵那実科女学校——川崎工場へ(2年)
○船津実科女学校——川崎工場へ(2年)
- (6月) ○多治見高女——川崎工場へ約200名(8・4年の半数) ○多治見実践女学校——川崎工場へ約200名(2年)
- (7月) ○武儀高女——川崎工場及び分工場へ約400名(8・4年)

＜昭和20年＞

上記は動員のほんの一例であるが、川崎航空機への空襲の危険が高まったため、遠隔地の学校より動員生徒の増設が開始された。多治見高女は20年8月10日に、武儀高女は5月に増設している。しかし両校ともすぐに学校工場化がすすみ、川崎航空機の学校分工場となった。ところが下記の表で示すように、20年4月以降になっても川崎への動員生徒の総数に大きな変化がみられないことは、遠隔地学徒増設分は岐阜市周辺校より補充されたものと思われる。このような地方学校の工場化と川崎航空機への恒常的動員は、軍需生産があらゆるものに優先された昭和20年を象徴している。そして学徒も22日を中心とする空襲の洗礼を受け、販商の生徒4名がその犠牲となった。以下はその氏名。

- 村瀬秀雄(市立岐阜4年) ※※
奥田秀彦(#)
安藤和雄(#)
毛利孝夫(市立第二校8年)

	19年11月	20年1月	# 3月	# 5月	# 7月
男子	7047人	6982人	6621人	6359人	6201人
女子	1038人	983人	952人	981人	902人

＜川崎航空機への動員生徒数＞

P27※ 未婚の女性を自発的な志願という形で軍事産業に働かせたもの。終戦時には全国合計で47万人を育てていた。
※ P V 巻末資料参照。 ※※いずれも「教育総合記 各名簿」による。毛利孝夫氏についてはP36参照。

＜付＞ その他諸産業への動員

本巣中学 → 相羽工業 岐阜第二中学 → 金華機械 武義中学 → 東濃航空・関丹物
恵那中学 → 萱場工業 恵那実科 → 帝國織維大垣 岐阜高女 → 川西機械
八幡高女 → 鐘淵化学大垣 武儀高女 → 関丹物、関精工・東濃航空
多治見高女 → 東濃航空・日紡関ヶ原 大垣高女 → 美津野・鐘淵化学・東海航空
岐阜農林 → 北満州・北海道復興 加茂農林 → 蛭ヶ野開拓・北海道復興

3. 動員生徒の生活

動員への概略とその実態は以上のとおりであるが、その動員生活がどのようなものであったか、多くの資料が残されていない現在、それを知る方法は体験者の話に耳をたたく以外にはない。当時岐阜中学の生徒であった鶴岡春夫氏(現岐阜市公害課長)は4月7日2月1日付の中日新聞の中で次のように述べている。

＜大豆入りの握りめしをかぶりつきながら＞

初めうちはジュラルミンのサビ落しが仕事だったが、やがて組立て工場に回される。「軍隊と同じでね、工具の数が合わない」と全員整列¹⁾。往復2往を見舞われる²⁾。大豆入りの握りめしをかぶりつきながらの飛行機作り。その間も熟練工はどどどん機場へととられていった。一生懸命に作っても素人は素人。胴体の前部と後部をつなぐリベット³⁾の穴が合わない欠陥階層が増え始めた。エンジンをかけると部品が吹とんだ。そのたびに号令がかかった。「全員整列⁴⁾」子供心に「こんなことしてたんじゃ勝てない」と思う……………。

また、II章で紹介した各務吉男氏はその手記の中で、動員生徒の生活について次のように述べている。

＜憧れの飛行機造りは……＞

(前略) さて、憧れの飛行機造りは、ところが8日もやるとうるさく苦練になってしまった。ジュラルミンの補綴材に1人が等間隔で電気ドリルで穴をあける、次の一人がエアハンマーで鉄を打つ、反対側の1人が鉄のかたまりで受けて固定する。ただそれだけの単純作業をエアハンマーの騒音が鳴り響く工場内で1日中やられるのには若もうらざりしてしまった。リラックスしようにと同級生と作業時間ふざけたりしていると、(中略) 運の悪い者は腰に拳銃とサーベルをぶら下げて工場内をパトロールしている若い憲兵に見付かってその場で三つ四つぶんなぐられたり、更にもっと運の悪い生徒はそちらから又憲兵詰所へ連行されてサーベルでこっぴどくたかれ、その後、詰所から連絡を受けた担任教師が何とも相対なく悲しい顔をして憲兵に頭を下げ、「先生の指導が悪い」などと憲兵にしかられながら、泣きつらの教士をもらい受けてくるのである。
今や、毎日学校へ通って、そこで勉強に専心できるということが、実はどんなに幸福なことであったか……初めて誰と言う程思ひ知らされて、深く悔やんだのであったが

肥てはもう後の祭であり、彼等も巨大な戦争の歯車の中に呑き込まれて行ったのであった。(後略)

また、遠隔地より親元を離れ、川崎に動員された多治見高女の生徒を引率され、生活を共にした奥田武氏(現八百津高教頭)は当時の様子を次のように語る。

＜ひ弱な身体にむち打って＞

動員された女生徒は、まだ14～16才の子供で、ひ弱な体のうえ、良家の子が多かったので家庭でも力仕事はほとんど経験のない者ばかりでした。そういう女生徒が一般の工員さんと共に朝8時から夕方5時までプレス機の終末処理の仕事をするわけですが、その仕事ぶりは痛々しいものでした。夜になるとホームソックで泣く子、煙火管制下で夜便所に行けず困る子、シラミにつかれて苦しむ子など、今思い出してもかわいそうです。けれども、わずかに救われるのは工員さん達が生徒を大切にしてくれたことと、食事が当時としては家庭内よりも恵まれていたということです。

同じく、岐阜市立中学の生徒を岡崎工場に引率し、工場で指導された岩見国太郎氏は、22日の爆撃を中心とした工場での生徒の動きとその時の自身の気持を次のように語る。

＜機銃掃射をくぐっての通勤＞

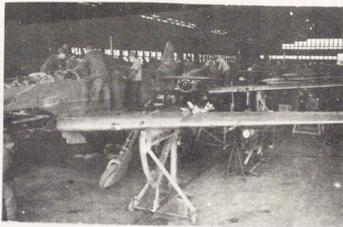
川崎では第3全組に配属され、エンジンを抜いた胴体を組立てる仕事をやらされ、1班から10班まで約150名を分けて、それぞれの位置について仕事をさせました。通勤は長住町の駅(現在の新岐阜)に集まり、電車に乗り三柿野駅まで行くのですが、22日の空襲後、岐阜も爆撃を受けるようになり、長住町から岐阜方面がずと見わたせるように焼かれてしまった。そんな中を電車に乗って行くといつやられるかもしれない。艦載機が来てバババと撃ってくる。三柿野まで行くのに指肝を冷やしていましたが、よりも死ななかったと今でも思います。しかし、生徒を前にすると気がシヤンとし、恐さが無くなっていったから不思議です。

＜野球のサインで退避を知らせる＞

22日の空襲までには空襲は度々あったが、工場の規則では警報発令時はまだ全組の内になくはいけない、ということになっていました。そんなことでは退避に間に合わないわけです。ぼくらの作業場は赤星山に近い所であったので空襲警報による退避の本命まで待つことはできたのですが、飛行機の胴体中での仕事のため、命令が生徒に聞こえないんです。これでは必ずやられると思い、ぼくは当時野球をやっていたので、野球のサインを出して知らせることにしました。そしてぼくは第3全組の中を回って警報を知らせ、すぐ飛び出せるようにみんなに約束させておきました。ところが第3全組の組長がいることで、「なにかあんたの所だけ退避が早い、どうもかしい、そんなことやってもらったら困る」とずいぶんかれました。しかしぼくは「そうですか、ぼくは何も知りませんがなあ、生徒はきっと機銃だからさっさと飛び出すんですよ」と答え

ておきました。向うはなじらんばかりに敵高するのがいつもでしたが、僕はその中で「くそー」と思いながらも、白状しなかったです。こっちはって命を投げうってやっているんだし、それに生徒の事がまず第一でしたから。

生徒は仕事も真面目にやるし、僕の秘密の命令もちゃんとあわて



ずい受けとってくれました。それが22日の大空襲の時役立ったんです。

＜腰にゆさぶられる様な震動―22日のこと＞

ぼくらは全員、一番早く赤星山の防空壕に避難しました。その横の避難壕に敵高の生徒がいたんです。敵高は少し遅れて入ってきました。ところが警報の時ははか西にいた飛行機が、防空壕に入るころには上空に飛んでいたんです。そしてものすごい爆弾を斜めに落とすんです。本当にもう腰にゆさぶられる様な震動でした。生徒の中にはあわてて外へ逃げ出すやつも居ました。それには往生し、「コヨー」と言ってしかつてくまえて、また元の所に入れるんです。あとから見たんですが、外には大きな穴があいており、壕から出てからもぼくらはあわててしまって、逃げて帰る生徒が半分位はいました。松林には朝鮮人が死んでいました。その死体は引き取り手がなためか1週間位はぼておかれてあり、本当に哀れでした。

＜雨ざらしの中での作業―その後＞

この空襲で、第3全組の作業場の屋根が無くなってしまい、雨の日なんか本当に困ったのですが、それでも仕事はやらされました。胴体作りのために電気ドライバーを使って仕事をするんですが、地面が濡れているので電気が手にビリビリと伝わってくるんです。危くてねえ。あんなものを長く使っていたら、それこそ死んでしま。ぼくは、「おけ、おけ」と言って仕事をやめさせていると、見回りの憲兵が来て、「何やってる」と言う。ぼくは「こんなもの使えんか、なんなら、あんたやってみい」と言ったが、憲兵はやらずに、ただ「こんなものやれんのか」とのしるだけでした。結局水を取り、電気が手に伝わらないようにしてから作業を始めることになったが、憲兵は「これは優秀な機械であり、一流の飛行機である。われわれがこれを作らなければどうするか」というようなことを言って帰りました。ところが警報と共に飛び立った飛行機はB29が間近に来ると姿を消すんです。これを見て僕はあの憲兵の言葉を腹の中で笑いました。

その後、機銃攻撃の日が続きましたが、先ず最初に逃げ出すのは腰にサーベルをつけた憲兵でした。

P29 ※明治14年に設置された軍事警察を掌る兵科。

V これまでの歩みから

これまで、私たちの調査によって明らかになったことを、できるだけ主観を交えず、30年前の事実に即して述べたが、この章ではこの小冊子をよめるまでの活動の歩みやそのなかで学んだこと、本文中で書きもした貴重な証言、文化祭の「各務原空襲展」によせられた意見、あるいは今後に残された課題等をおもいつくままに記しておくことにする。

山ごと古墳がない

僕達の学校は1971年に新設された。昨春卒業した1期生がこの年5月1日郷土研究部を発足させ、この日伊弉瀬跡を訪れている。同年10月にはこの遺跡の最終発掘調査に参加した。そこは中小尾集落の南で、飛行場の滑走路の東端から約1km。それぞれに飛ぶジェット機の轟音に悩まされながら縄文人の探求が進められた。ある日突然鉄器を掘りあてて一瞬トキリ、よく見ると明らかに爆弾の破片で、遺物含有層に突き刺していたという。今からおもうと奇妙な縁だった。なお、この破片は第1回空襲展に展示された。



出でた爆弾破片の一つ。酸化が激しい

2年目(72年度)は古墳の分布や保存状況の調査を行った。夏、菅大將に出くわしたりしながらムムンする夜み分けに入ったのはよいとして、遺跡台帳に載っている古墳がない、山ごと削り取られていないといったことも稀ではなかったことは強烈な印象として残っている。

空襲をテーマに選ぶ

こうして、最初の2年間は主として考古学的な研究をしていたのだが、その中でもさまざまな形で現在とかかわりあわざるを得なかったことが、第3年度のテーマ選定の基礎になったようだ。年度初めの部会で、身近な現代の、そして各務原という地域性のあるテーマをとることになり、先生の体験を聞いていたこともあって、2,3の案の中から空襲にしよう。それほど深く話しあった訳ではなかったが、これは予想以上の広がりや関わりをもつ内容を認めていたのだ。

調査の段階に入った。しかし、般事典などに具体的な記述が少なく、手振りをつまみくわした。とくに体験者の証言を聞こうとしたが、その所在がつかず、先生に探してもらった。こうしてまず金武さんや今尾さんを訪問しようとしたが、どうもまく話しかけられず、付添い役の先生に聞き取りの主役をおしつけ、僕達は驚いて見習いといった格好だった。

聞き取りを続けながら、一方で、学友に依頼して以前から各務原住民であるとみられる父母を対象にアンケートを行った。河合敬三さんの手記を始め、貴重な体験記をいただき、また体験者の紹介もしていただき、以後の活動に道が開けてきた。

「各務原空襲展」を開く

秋。それまで体育館等施設の未完成や活動の蓄積に乏しいなどの理由でもたれていなかった文化祭が、10月8日に初めて行なわれることになった。郷土研究部は披露された古墳の写真など前年度までの活動をコーナーを設けた他は、空襲調査の中間発表を行なった。それまでの調査によって明らかになった実態と証言を中心に紹介しながら、広く空襲一般にも触れる内容を企画した。当日は予想を上回る学友、先生方、父母に見てもらえた。アンケート用紙も多数回収でき非常に参考になった。が、やや感性的なものも多く、射的射撃い意見や批判が少なかったことは、展示内容の希薄さに起因するものと考えざるを得なかった。それでも、住民の方の意見などは、僕達の活動の意義を再確認できて、大きな励ましとなった。

以下にアンケートから代表的なものを若干収録しておく。

たいへん感激した。本当にその一言につきる。我々が忘れてはならないものを、今一度考えさせられたようだ。戦争の悲劇さ、また遺跡、そしてその破壊をよくベネルの写真と、日紙に書かれた文章で表わってあった。今後はその研究だけでなく、各務原の郷土を少しでも守っていく何らかの努力も、できたらやってほしい。とにかく今日一日でこれを取りはずすのじゃもったいないことだ。次回こそ君達の力で2日くらいいっせいでやる努力してくれ。(文化祭実行委員長)

いろいろ実物のものがあってよかったです。どういうことを訴えたいかということをもっとはっきり表わした方がいい。(一生徒)

戦争の事は私たちは実さいに経験したわけではないから、ほんとうに言って、これらの資料を見ても映画をみても本を読んでも、わからないと思う。これまでもいろいろな映画、本、資料を見できたわけだが、一部の人がはじめたものなのに、他人が死ぬ戦争なんて、あまり悲しすぎるといふも思います。そう思うだけで、それ以上はわからない。この郷土クラブの発表では「母と子」という詩と記念碑の文字「加加戦災の思い出」というのを見たとき、一番ゾーンときた。本当に戦争は悲しい。(一生徒)

私は各務原市に住むようになってまだ5年にしかなりません。戦争中は外地に居りましたので空襲の事も知りません。今日、この展示会を見させていただきました。又、勉強に忙がしい若様が、よくこれだけの資料をお集めになったと感心させられます。この文化祭に当っての空襲展はヒット中の大ヒットです。(住人)

たいへんすばらしい企画だと思います。現代に生きる郷土の歴史の発掘は、過去と未来をつなぎ、私たちの生き方に示唆深い教示を与えてくれます。空襲展示、本当にご苦労さんでした。(東京芸術座 関口潤)

中間報告書「各務原空襲の記録」を発売

文化祭はあわただしく過ぎた。こんどは年度末めがして中間報告書を作成することになった。しかし、限られた活動時間であるから、ひとまず工場や基地関係に広げることとをきり、これまでの市街地や農村部の調査を深め、証言の中の記憶のあいまいさや矛盾点を明らかにし、多くの人から傳信を得るよう努力した。また、こうした中で聞き取りや研究の方法をつかんでいった。

僅か12ページの「各務原空襲の記録」の印刷が完了したのは7月4日3月であった。中途半端なままであえて印刷にふみきったのは、学友や市民に問題を提起して、これを契機として関心を広げ、あわせて次年度の部活動の飛躍を期したかつからであった。

反響は予想外に大きかった。マスコミが取り上げてくれたこともあって、市民から共感と激励の手紙がきたり、さまざまな階層の人から購読申込みがきた。なかでも多治見の各務吉男氏からは詳細な体験記をお送りいただき、一同感激した。しかし本書では紙面の関係でその一部を断断して載せる結果になった失礼を深くお詫びしなければならない。

また、この小冊子もひとつの刺激となつて、空襲体験をもつ市民や教師たちの間で空襲記録を残そうという機運が起り、昨年9月5日には「岐阜空襲を記録する会」が発足し、発会総会では僕達の研究成果をふまえて、先生が各務原空襲の概要を報告してくれたという。

工場・学徒動員生の被爆状況を明らかに 一今年度の重点一

昨年度の活動では攻撃目標の中心だった工場、軍関係が殆んど手つかずだった。また、旧制中学の学徒動員生だった等峰一氏の証言を聞いてから、僕達と同年令のものの戦争とのかかわりに深い関心をはらわずにはいられなかった。今年度の課題は自ら明らかだった。再び聞き取り調査に出かけた。今度は先生に頼ってはいなかった。体験者を探し、昨年からの経験者と新入部員とのコンビで訪問し、後で半分してテープから原稿紙に起していった。こうして当時川崎工場に勤務しておられた安田氏や学徒動員生を引寄せた若見氏などから貴重な証言を得た。また被害の数量的把握や各校の学徒動員状況などをつかむため、文献をあさり、新聞や学校誌等にも目をおとすよう努めた。

秋、10月8日の文化祭に再び「各務原空襲展」を行なう。昨年度のアンケートをふまえて実物資料や写真など視覚的なものを出来るだけ多くした。当日は多数の学友が訪れてくれた。アンケートも多く回収できたが、大半が前年度より前進したことを認めた好意的な感想や意見だった。

文化祭「第2回各務原空襲展」アンケートから

○苦心の貴重な文化財、今後も大切にしてください。後から思えば、愚かな事も、その時は真剣に考えて、人間は少しずつ進んでいくのでしょ。

若い世代には、より賢明に明るい世界を生きて欲しいと願うところ、この文化財を貴重な教訓として。



○戦争といふものの意味はどういうもの、皆さんの意見を書いてはしなかった。外人はどう思っているかということも、いろいろな人に聞くところだと思ふ。たゞ訴えるだけでなく先生など戦争を体験した人の意見もほしかった。また、女性の受けとめ方、男性の受けとめ方のちがひも知りたいて思う。



○去年より前進したということが良くわかった。

戦争と、それが与える人間の問題がよくわかる。日本は戦争を否定しながらも、軍需産業と名のつくものが発展し、かつそれを承認する状態にある。この矛盾は一人で考えていてもしかたがないことである。多くの人間が静かなる行動に出なければならない。

今回のこの展示の訴えている事は、去年よりもだい

ぶ人間性の問題に近づいてきたようだ。僕ももっとこれを発展させていくことを来年に期待する。

○心から笑うことも泣くことも出来ないと言っている君達の精神的価値観のレベルをもっと下げて考えてほしい。戦争当時（収集されてよくおくりかと思うが）よりはるかに幸せな現在の日本です。今後はきびしい経済情勢をいかに切り開いてゆくかは、君達の毎日の生活の中から（特に資源消費）工夫し、考え出されてゆく事を望みます。

今後の研究に期待しています。御苦勞様でした。（4才子）

○今まで戦争に関心は持っていたものの、両親などから戦争体験の話を書くのがいやでした。何かはものにかわるような感じだったんです。戦争を知らない私たちですが、このままでいけない気がします。両親はよく戦争の話をしてくれましたが、今日見たような生々しいものは聞いたことがありません。やっぱり大人の人たちも戦争体験とありものに、ふたをしたがっているのじゃないか。



○空襲の焼け跡に立つたことのない、爆弾で手足がバラバラになった死体の臭いを知らない僕たちが戦けれど、展示の中にある空間の重さというか烈しさというものがわかるような気がする。しかしこうした空襲で多くのものを失なう犠牲者は何を意味するのかわからない。何が起きた結果を考えたのか。それは人類の悲劇であると思う。戦争反対するものを非国民と呼び、またそうしなければならなかった日本の宿命。国土が破壊され始めて知る人間のおろかさ。しかし、そうした要素は今日戦争を知らずに生きている僕たち若い世代の中にもひんできていると誰がいえるだろう。そうした中でこそ、この研究の意義があるのではないか。

慰靈碑の建設を

文化祭が終わってから、この冊子をまとめるために調査を続行した。このなかで、ようやく岐阜商業学校の犠牲者をつきとめることができた。学校にも記録がなく、困難をきわめていたのだが、同級生だった方からようやく氏名を聞き出すことができたのである。そして、当時3年生だった故毛利孝夫氏の父小左氏を岐阜市長良天神のお宅に訪ねたのは12月6日だった。年老いた小左氏はとても喜んでくださり、孝夫君のことを次のように語られた。

孝夫は活動的な女子で、川崎への動員が始まってからも元気に出勤していました。

警報があったら防空壕へ入るという触れがあったけど、鑑戦機が川崎の方へ向うとこを随へ上って見ていました。息子が帰宅してからそれを話すと「オッサンた(工具達)は遅いけど、わっちんたは遅いでな、ほんで山へ逃げてました」と夕食のとき言っまして

たので、「そりゃ結構や」といっておりました。こうしたことが2、3回あったでしょうが。その日もまた二階へ上って見ていました。ところが、3時半か4時頃になってお使いの方がみえて「あんたんとこの息さんが今朝の爆撃でやれなかつた」と。まだ虫の思くらいはあるだろうと思って家内と出かけましたが、だめでした。こりゃどういうこっちゃと聞いてみると11人の友達と息子が最後に防空壕へ入ったため、撃へ当って前へ貫通し、出血多量で死んだということでした。なかなかあきらめるにあきらめられませんでした。

とくり返し、くり返し語られた。そして遺影をみせていただいてから心重く辞去した。

中国人や朝鮮人の殉難状況をはじめ今後に残された課題は多いが、ききやかなこの小冊子をまとめた今、なんとか殉難者の慰霊碑を建てられないかと思う。僕達の知っているかぎりでは、那加に尾務義氏が建てた「那加町戦災思い出の日」と川崎工場内の「慰霊碑」が手厚く建てられている。赤星山は採土されて今はなく団地造成中だが、多数の犠牲者を出した旧防空壕に極く近い位置に公園が造成されることになっているから、せめて僕達と同年令で犠牲になり氏名も明らかになった岐阜商業学校4名の生徒の慰霊碑を、岐阜商高の皆さんや同窓会の皆さんはじめ各界の御協力を得てここに建てられたい、というのが部員一同の心からの願いである。

※孝夫氏の履着や飯食の皿に「工」の字が入っているのは、戦時下で商業教育は必要ないとして、第2工場と名称替えされたためである。このため商業科の先生の一部が女子商業へ転勤になったという。



毛利小左氏(左)と孝夫君の遺影(右)
※

巻末資料

<川崎航空機岐阜工場に関する資料>

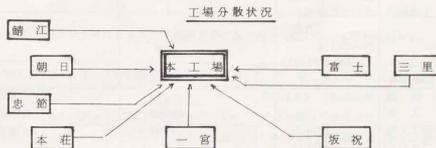
A. 「川崎航空機 岐阜工場稼働状況」

1. 稼働の命命前の状況

工場名	原名称	位置	生産用(坪)	厚生用(坪)	計(坪)	用途	転用方法	使用開始	備 用
本庄 分工場	東洋紡 第一工場	岐阜	6700	2170	8870	タンク冷 計器操縦 翼の部品	借用	昭17.12	
三里 分工場	〃	〃	4189	1315	5504	〃	〃	昭18.10	利用状況は30%ほどにすぎず昭19.11より木製尾翼を作りだす。
朝日 分工場	東洋紡 朝日工場	〃	5000	1994	6994	操縦翼 パイピング	〃	昭18.11	
富士 分工場	富士瓦斯 紡岐阜	〃	6229	2468	8697	単一部品	〃	昭18.5	
忠節 練成場	片倉製糸 岐阜工場	〃	4995	1820	6815	練成場 宿舍	買収	昭17.10	昭19.12 分工場とする
木曾川 練成場	神楽製糸 工場	木曾川 町	—	—	6167	(女子)	〃	昭18.10	昭19.12 一部を分工場とする(設計研究機関)
長良 分工場	岐阜 刑務所	岐阜	970	—	—	単一部品	速帯下請	昭18.4	囚人800人を作業に従事させる。(全国最初)
坂祝 分工場	坂祝工場	坂祝	4192	1796	5988	機械加工	借用	昭19.3	

2. 稼働命命時の状況

昭和19年後半における空襲の激化に伴い、同年末より工場の計画的分散稼働に着手し、林間工場(ブラック)地下工場等の建設、並びに転用工場の獲得に努力する一方、第一次として各務原工場は岐阜周辺分工場・学校等に稼働させる。昭和20年4月軍需省より緊急稼働命令により更に分工場の増加を計るとともに、爆撃の進歩に伴い急速広範なる分散稼働を実施する事となれり。



特設車庫

3. 分散疎開に関する命令(昭和20年4月4日)

分散の範囲

疎開製品	製造能力		摘 要
	近郊分散	疎 開	
キ-67	66%	34%	別に単一関係の全力を疎開
キ-100	40%	60%	

疎開方針

- 岐阜工場は速に岐阜付近、及び各務原飛行場の近傍に急速に分散する。
- 「キ-67」関係の一部を速に中津川・太田及び多治見地区に分散するとともに、有力なる地下施設を瑞浪付近に設置し、量産態勢をとる。
- 各務原飛行場地区の整備作業は近郊に分散する。別に「キ-61J」I 都城に移転す。

疎開実施計画の時期、並びに計画

構成地区	岐阜	瑞浪	太田・和知
目標能力(9/20)	キ-67 67 キ-100 100	主として部品関係 キ-67, キ-100, 102	キ-67 30
実施時期	4月前半までに完了する。	①速に着手し、移設並に地下設備の完成と共に作業を転移し、概ね6月頃には重要部分の收容を終る ②9月に集成部品の作業を開始する。	
地下施設疎開	軍官公共建物転用 学校転用	岐阜整備学校格納庫二棟	
	工場転用	福井精練勝見支工場(決定) 大日本紡績岐阜(内定) 外一小工場(約2000坪)	近江絹糸中津川(31)
	新設移転		6700坪
	宿舍設備		3070坪
地下防護工場	地下工場		18000坪
	覆土式半地下工場	1900坪	2040坪
	山林間バラック	3000坪	20000坪
	付属施設		30000坪
合計	4900坪	60000坪	29000坪

飛行場	各務原飛行場	当分の間 各務原	当分の間 各務原
摘 要	地下工場は格納庫移設工事として会社において実施し軍需省官設工事	地下工事は主として陸軍(東海軍)担当とし概ね7月之を構成する。	①太田付近に滑走路を新設 ②地下工事については瑞浪と同じ

(付)

- 分散疎開完了予定時期 (命令)昭和20年7月末日
- 疎開経過並に実施状況 (軍官公共建物転用 昭和20年3月12日)
 - 1) 533部隊並に岐阜整備学校格納庫各一棟借用
 - 2) 「キ-100」整備作業実施、月産能力約60機

4. 工場転用(分工場)

疎開工場	原名称	転用建設決定	使用開始	作業面積	人員	作業種目
福井分工場	福井精練 勝見支工場	S20,3				「キ-67」大物熔装部品 月産30台予定準備中
田神分工場	大日本紡 岐阜工場	S20,4	S20,4	約1000坪	(概)3500人	「キ-67」後部胴体組立月産40台 〃 外翼組立 月産30台 「キ-100」発動機機装部品より完成まで月産150台
中津川分工場	近江絹糸 中津川工場	S20,4	S20,5	約3500坪	約500人	「キ-100」鍍金車一部品 「キ-67」作業全部 「キ-67」外翼外組月産30台 〃 外翼内組桁削月産60台 「キ-100」主桁組立及び桁削 月産150台

(簡要) 福井分工場はS20, 7福井空襲の為全焼、一個の製品もたすに到らず。

疎開工場	建物	建設始	建設完	使用開始	作業人員	作業種目	摘 要
須衛	バラ					「キ-100」胴体結構	
作業場	ツク	S20,4	S20,6	S20,6	2000	900	及び主翼各月産60台
芥見							「キ-100」装飾部品 岐阜空襲後使用開始せるも製品できるに到らず。
作業場	〃	S20,6		S20,7	1300	300	金属材料倉庫

雫子 作業場	バラ ツク	S20.6		(予定) 2000	未移動 に限る	「キー100」全組構築 作業 月産60台予定	S20.8建物は80号完 成していたが道路等未完
美濃 作業場	〃	S20.7		(予定) 2000		「キー67-100」燃料 タンク月産60・80台の 予定なりしも未準備	で、完成した棟なく、 全然使用せず。
瑞浪 工場	地下 工場	昭和20 年未なり しも (予定) 工場進 捗上よ り見て 20年12 月にな る如く 思考	瑞浪	面積 18000 (予定)		「キー67」一貫作業 (ただし全体組立整備 作業はのぞく)	S20.8一期工事7920 坪の実質作業完了、切広 げが50号残る。しかし 道路照明装置未完成のた め作業継続できず、軍に 切削機械10台を運せる のみにて据付作業は未完 成なり。即ち一部機械用 倉庫として使用せるのみ で、生産には使用に到ら ず。
						「キー67」鍍金切削 機械加工作業の70% 程度 以上は予定のもの	地下工場＝「キー100」 試作機切削、鍍金機械 作業の一部 地下工場＝機械治具の 製作、焼入れ物の生産 準備部間並に試作機部 品製作より組立まで月 産3機(以上は予定)

5. 昭和20年7月における疎開工場の建設状況(単位 坪)

地区	岐阜地区		瑞浪・多治見地区		太田・和知地区		合計	
	命令	実施	命令	実施	命令	実施	命令	実施
地上移転			6700	(6700)				
地下		18000	18000		2040	2040		
防護 工場	半地下	1900	400	3000	(1500)	20000	7000	
	バラツク	3000	3000		(3000)		(13000)	
計	4900	3400	27700	18000	22040	9040	54500	30440
		(1500)		(9700)		(13000)		(24200)
	瑞浪	18160	芥見	1400	左翼ライン	(11000)	業老	(3000)
	和知	5060	雫子	2000	中央ライン	(6000)		
	須衛	2000	美濃	2000	指斐	(4240)		

6. 工場疎開(学校工場化)

	原名称	所在地	転用期間	作業面積	作業種目	
	加納作業場	加納高女	岐阜 加納	s19.4	290	胴体、肋材、主翼小骨。(月20台)
	雲雀丘作業場	岐阜高女	岐阜雲雀丘	s19.4	1146	覆部品、電装部品。(月産20台)
	本果作業場	本果高女	本果郡	s20.2	約290	風防(月産230台)覆部品(月30台)
	富田	富田高女	岐阜 長森	s20.2	990	装備部品「キー100」(月200台)
	武儀	武儀高女	武儀郡	s20.5	135	機体刃具ゲージ(月産1500台)
	多治見	多治見	多治見	〃	510	鍍金単一部品(月産100台)
	〃	多治見家政	〃	〃	120	〃(月産30台)
	〃	多治見実践	〃	〃	150	〃
	〃	多治見中	〃	〃	180	外翼外組付削(月産60台)
	本果	本果中	本果郡	s20.7	約220	発動機架、排気管、後端風防 (月産各30台)
	済美	済美高女	岐阜	〃	約38	燃料タンク防弾板覆(月50台)
	(山科作業場)	山科研習所		s20.3	1100	「キー100」尾動翼(月産50台)

7. 6月22日・26日及び7月9日の空襲に対応しての人員移動

発送地	到着地	人数	摘要	発送地	到着地	人数	摘要	
各務原	須衛作業場	30		志穂分工場	和知	100	工場建設のため	
〃	岐阜市守衛	800	雲雀丘・富田高女	本庄	〃	鯖江	200	
〃	田神分工場	1500		富士	〃	本果	600	本果中・本果高女
〃	一宮工場	300		〃	〃	朝日	150	
〃	中津川工場	300		〃	〃	朝日	300	
〃	坂谷分工場	100		〃	〃	中津川	100	
〃	その他	500		雲雀丘	〃	各務原	200	本工場

(6月22日・26日)

(7月9日)

8. 疎開後における生産状況

疎開後、終戦に到る期間が僅かなりしを以て未だ生産をなす所までには到らず比較的早期に完成した須衛作業場において「キー100」主翼を三機完成せるのみなり、尚其の当時の生産状況は月産60機の能力を有し、将来更に上昇せしむる予定なり。

B. 「岐阜工場 工員数及び実働工数」

		<昭和19年>									
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
工員	男	26,522	25,956	28,792	30,239	28,563	26,838	25,279	23,634	22,662	21,504
	女	2,990	3,567	3,595	3,541	4,955	6,288	7,059	6,569	7,007	7,351
学徒	男				752	2,381	4,409	6,846	7,541	7,363	7,153
	女					251	503	859	1,051	1,051	1,049
合計		29,312	30,523	32,387	34,532	36,150	38,038	40,143	38,795	38,083	37,057
実働工数		6,561,768	6,716,188	6,506,795	7,499,955	7,935,145	8,466,831	8,351,180	8,515,284	8,277,560	8,009,172

		<昭和20年>									
		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
21,081		20,350	19,729	18,886	18,684	18,465	18,320	18,243	18,243	18,261	18,288
7,421		7,496	7,569	7,586	7,569	7,549	7,500	7,471	7,399	7,257	
7,047		7,041	6,932	6,982	6,621	6,501	6,359	6,263	6,201	6,152	
1,038		1,005	983	952	952	946	531	921	902	893	
36,587		35,892	35,213	34,406	33,826	33,461	33,110	32,898	32,763	32,590	
8,232,075		8,434,620	8,275,055	7,353,215	7,949,110	7,528,725	7,780,850	7,399,800	7,207,860	7,169,800	

(実働工数内には学徒の工数は含まず)

ちなみに、昭和14年～18年の平均工員数をあげれば

昭和14年—6,322人、昭和15年—6,661人、昭和16年—8,007人、

昭和17年—11,286人、昭和18年—19,015人。

国民自身政治を決めていくような国がら、永久の平和をもたらすための希望にみちている。もし、国民が「戦争すべきか、どうか」を決めることになったらすれば、国民はそんな不幸なことをはじめるのをいやがるのは当然である。なぜなら、戦争になれば、国民は戦争のもたらすあらゆる不幸を自分の身に受けなければならないからである。戦争で死ぬことも、戦争の費用をひきうけることも、荒れはてた国土をはねおって復興することも、みな国民にかかっている。

カント「永久平和論」より



標記のように「各務原飛行場と川崎航空機工場」と名づけられたこの写真は、各務原への空襲を準備するため、1944年11月23日に米軍偵察機が高空から撮影したものである。飛行場周辺の軍施設や工場群など目標物の詳細が書き込まれている。そして西端の赤星山を含む「KAGAMI-YAMA」(各務山)は「Probable Fuel Storage & Warehouse Area」と記され、その線で囲まれている。すでに空襲前年の秋には燃料貯蔵庫や倉庫が隠されている区域と予想して注意をはらっていたわけである。基地周辺のその他の山、三井山、丸山、伊木山等もすべて同じ符号で囲っている。このことは本書第Ⅲ章で金武有一氏が、山麓の集落でありながら7月12日に夜間空襲を受けたが、あとから考えてみれば軍需物資が隠されていたから、かえって危険であったわけだ、という意味のことを述べていたことに符合している。

なおこの写真は本書の校正の段階で入手したものである。撮影範囲は表紙裏の「各務原空襲関係地図」に図示した。(表紙裏の地図とこの写真は南北が逆である事に注意。)

<主な助言者・協力者一覧>

現住所
伊藤正次 各務原市鶴沼三ツ池
今尾義裕 // 那加本町
岩見国太郎 岐阜市堀江町
奥田 武 可児郡兼山町
各務吉男 多治見市池田町
加藤嘉雄 各務原市前渡西町
金武有一 // 蘇原伊吹町
川谷敏郎 // 蘇原豊田町
坂井寛衛 // 鶴沼中小屋
佐光辰巳 美濃加茂市大田町栄
仙石清弥 各務原市鶴沼川崎
土井武夫 岐阜市端雲町

現住所
長瀬京二 各務原市各務
中野敏雄 各務原市鶴沼川崎
丸山 茂 // // 山崎
毛利小左 岐阜市長良天神町
等 峰一 // 木造町
安田 博 各務原市鶴沼羽塚
山口元松 // 那加日の出町
山本 典 岐阜市真福寺

○岐阜日日新聞社
○岐阜空襲を記録する会
(アイウエオ順・敬称略)

<主な参考資料・文献>

- 「岐阜県史」(通史編近代下)
- 「那加町史」
- 「鶴沼町史」
- 岐阜タイムズ社編「岐阜年鑑」(824年版)
- 「岐阜合同新聞」(820年6月23日号ほか)
- 中日新聞社編「岐阜人物地図」
- 原田良次著 中央公論社「日本大空襲」
- ダイヤモンド社編「航空機—川崎航空機」
- カーム、バーカー著、サンクイ新聞出版「B29」
- アメリカ合衆国戦略空軍爆撃調査団報告書「名古屋空襲の効果」
- 出版協同社「日本航空機総集—川崎篇」
- 文林堂「世界の傑作機」(「飛燕」と「五式戦闘機」の号)
- 雑誌「丸」
- 「岐阜百年史」
- 多治見女子高「創立五十年誌」
- 「岐阜七十年史」
- その他県内各高等学校の校史・誌

—部員名簿—(アイウエオ順)

加納洋光(3年) 岩崎 隆(2年)
兼田英明(〃) 近藤啓司(〃)
後藤寅文(〃・部長) 岩井美貴子(1年)
鷺見達郎(〃) 中村富久美(〃)
—顧問—
尾関 章 久保広男 坂井治雄



各務原市図書館蔵書

各務原空襲

郷土研究 第2号(1974年度)

1975年3月1日発行

岐阜県立各務原高等学校 郷土研究部

各務原市蘇原坂井町

郵便番号504 電話(0583) 83-1015

(印刷所) 足近印刷 電話(0583) 92-2768

